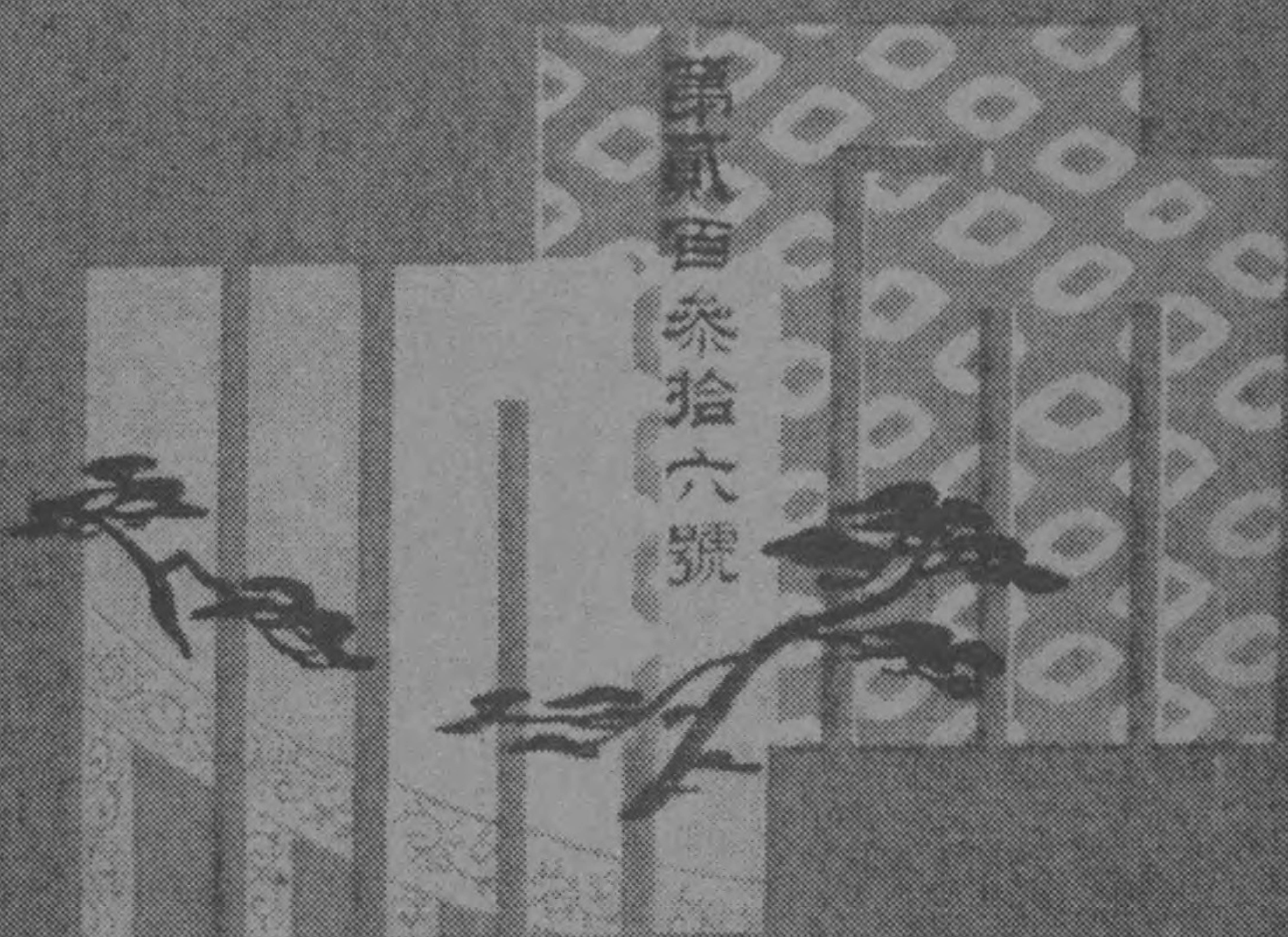
明治三十四年九月五日發兌

女鑑



女鑑第貳百叄拾六號

目録

定價
一冊 金拾錢
六冊三ヶ月分 前金五拾七錢
十二冊半年分 前金壹圓十錢
廿四冊一年分 前金壹圓廿錢
全國無遞送料

明治三十四年九月四日印刷
明治三十四年九月五日發行

編輯兼發行人 川崎直衛
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
印刷人 並木眞雄
東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地
發行所 國光社
發賣元 靜思館
（電話本局一千三百七番）

社告

從來各所より御寄贈にかゝる新刊新聞雜誌及圖書等單に**國光社**とのみ御認めの分は往々當部へ着せず爲に折角の厚意も遂に無にするに至り遺憾少からず候就ては甚だ御手數ながら以後必ず**國光社女鑑編輯部**へ宛て御寄贈被下度此段謹告候也

東京京橋區築地貳丁目廿一番地國光社内

女鑑編輯部

稟告

本誌(女鑑)編輯に關する即ち原稿投書等の事件は必らず**女鑑編輯部**へ御送被下度候又發賣に關する總ての事件は必らず**靜思館**へ宛御發信被下度願上候也

東京京橋區築地二ノ廿一、國光社内

女鑑編輯部

(電話新橋八十八番)

東京京橋區南傳馬町一丁目七番地

靜思館

(電話本局千三百七番)

本誌定價改正

壹冊代金拾錢

六冊代前金(三ケ月分)五拾七錢

拾貳冊代前金(半ケ年分)壹圓拾錢

廿四冊代前金(一ケ年分)貳圓拾錢

全國無遞送料

本月より右の通相改め申候尤も是迄前金御拂込濟の分は從來の定價に據り候也

明治卅四年九月

女鑑發賣元

靜思館

日本婦人

第貳拾貳號
八月廿五日發兌

帝國婦人協會發行

「日本婦人」は、創刊以來常に世の風潮に先んじ、自ら期して巾幗社會の指導を以て任せり。其記事體裁の高尚優雅にして、俗流に超越せるは、已に世の定評ある所なり。

思ふに搖籃を搖かすの手は、以て能く天下を搖かすに足る、社會風潮の清濁は、其源男子にあらずして女子に在り。一家を醇正し一國の風敎を醇美ならしむるもの實に女子の勢化によらざるを得んや。顧みて我國現下の狀態を見れば、新舊過渡の時代にありとはいへ、萬づ錯雜紛亂、婦人社會の事、之を往昔に比して、寧ろ退歩せるの感なき能はざるなり。吾人微薄く、力非なりと雖ども敢て吾が信ずる所を以て、其微力の盡くるまで、世の至仁眞誠志を同しうするの諸賢に、其同情同感を覓めんとす。

「日本婦人」は斯くの如き意氣、斯くの如き微衷を持し、孜々黽々、而かも徐ろに、婦人社會の木鐸となり、風敎を純正端一ならしめ、以て聊か貢獻する所あらんことを期す。

次號よりは、發行期を十五日とし、記事體裁も共に革新する所あるべし、

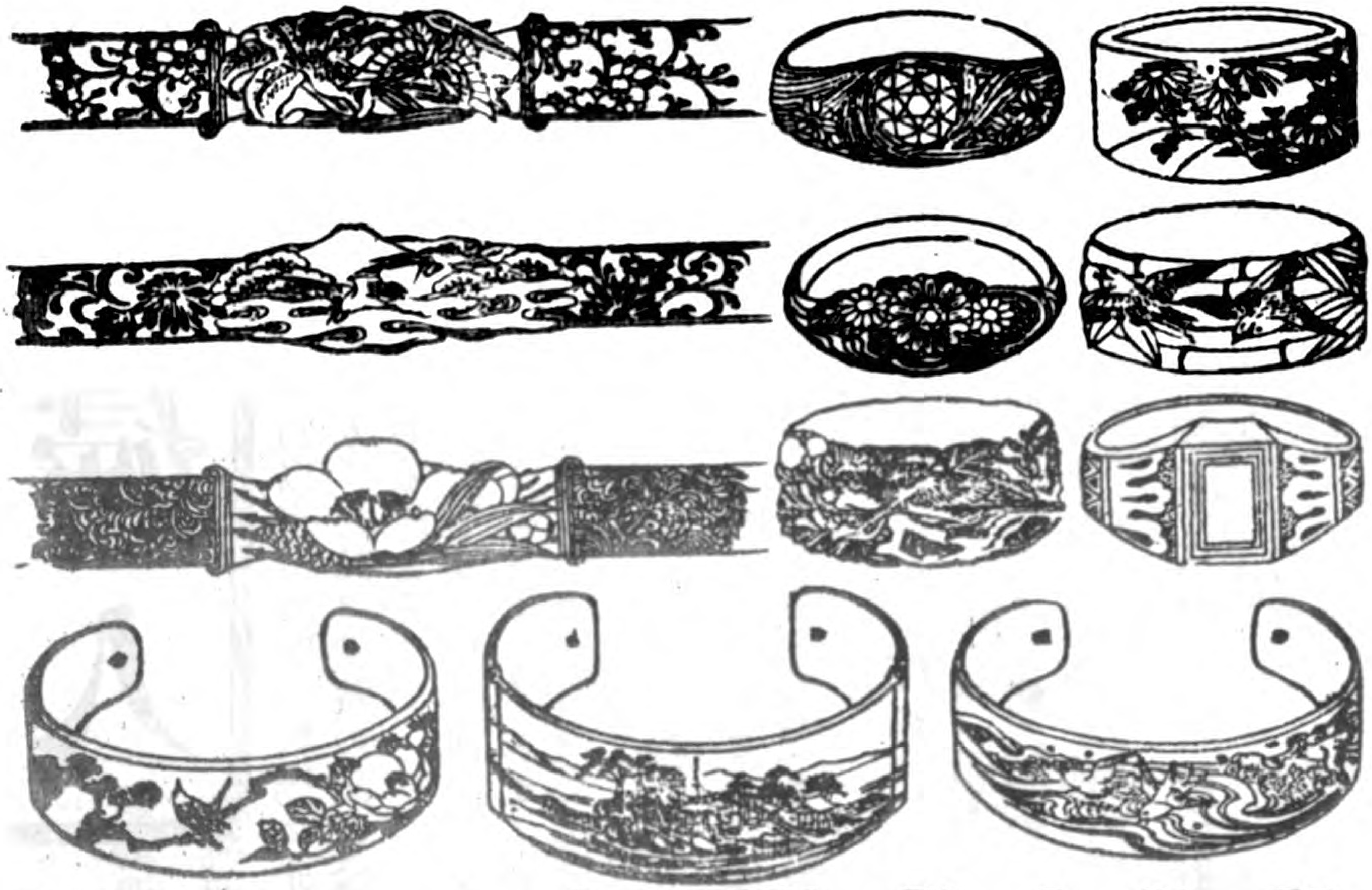
要目

○其他 ○雜報 ○文藝 ○流行 ○小說 ○漫談 ○數圖 等例に依て趣味津々

毎月一回
定價一部金拾五錢
郵稅一冊金壹錢
會員へは無料にて配付す

麹町區元園町二丁目四番地
帝國婦人協會
電話番町六四六

吉沼製作品



金製指環

●十八金二匁五分付片切彫刻付
甲價 十六圓
乙價 十四圓

●廿金三匁付平象嵌片切彫刻付
甲價 廿二圓
乙價 十九圓

●廿金三匁付薄肉彫刻付
甲價 廿六圓
乙價 廿三圓

●廿二金三匁五分薄肉象嵌彫刻
甲價 卅四圓
乙價 廿九圓

●廿二金三匁五分厚肉彫刻
甲價 卅六圓
乙價 卅一圓

●廿二金三匁五分厚肉象嵌彫刻
甲價 卅八圓
乙價 卅二圓

●廿二金三匁五分肉彫象嵌イヤモンド入
甲價 二百五十圓
乙價 百八十圓
丙價 百三十圓
丁價 九十圓
戊價 六十五圓
巳價 五十圓

●廿金三匁付角小判形無地印面指環 十五圓七十錢

●廿二金四匁付角小判形無地印面指環 ●廿二圓四十錢

●純金五匁付角小判形無地印面指環 廿九圓五十錢

外ニ段付模様付形状ノ如何ニ依リ價格ニ差アリ

金製帶止

●十八金製高彫[illegible]付
甲價 卅五圓
乙價 三十一圓
丙價 廿七圓
丁價 廿三圓
戊價 十九圓
巳價 十六圓

金製根掛

●十八金一匁五分付片切彫刻
甲價 十一圓
乙價 九圓三十錢

●廿金二匁付片切彫刻
甲價 十四圓五十錢
乙價 十二圓五十錢

●廿二金二匁五分片切彫刻
甲價 十九圓
乙價 十七圓

●十八金三匁付蝶番付三ツ折片切彫刻
甲價 廿圓
乙價 十七圓五十錢

●廿金三匁付蝶番付三ツ折平象嵌片ツ彫刻付
甲價 廿三圓
乙價 廿圓

◎印材製作篆刻 應貴囑

右の外金量の多少寶石の大小又は彫刻の繁簡精麁により代價に高低の品種々あり

時計及寶玉類貴金屬美術品商

東京市日本橋區通り二丁目
吉沼又右衛門
電話本局三十三番
長距離電話接續

菓のしるかれおつさ
しりもよ言て植て常無
くりおもとて　水川と
重ねしおかすらきて
いつあさく名の白菓
とまりて　ちくへりあれと
　　　　　　棋熊

以津ちの柳の枝は
　　　　　咲みえん
うちから人の色ちし
　　　　菓もて
すあまりなるふとさき
　　　　蔵らく　つくり
いろの稜とらや
　　　　かさりてや
　　　　　　さく

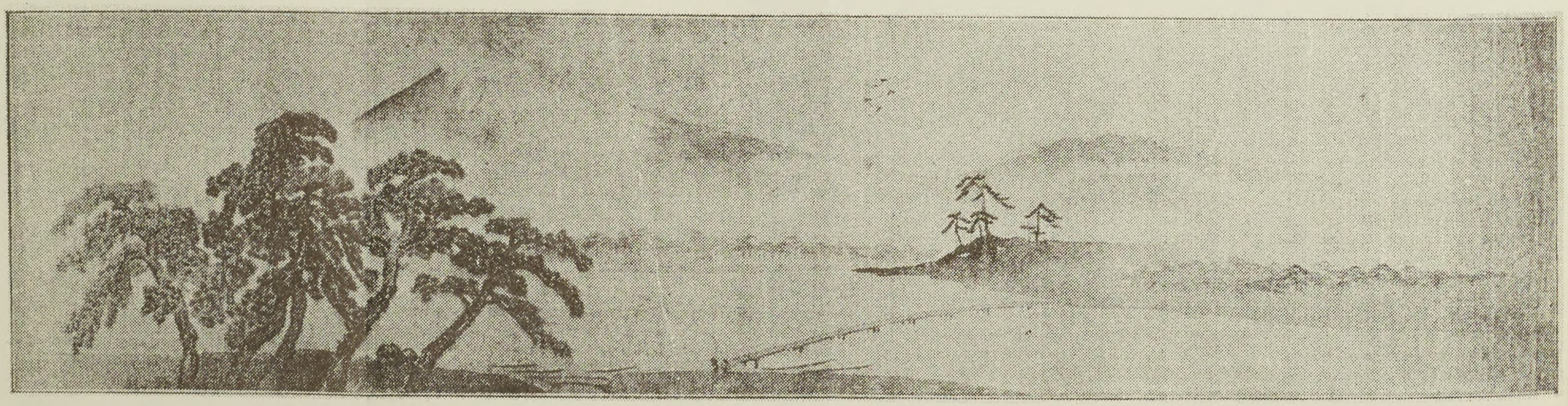
うちつけのゆとし
いに菓もおのく
まるいろそ名もし　え
りしし品中し　とあく
いる国りとおもしり　根分
いろんさなやおん　漬く
いる盛及ちあのりへむ
かうらあれこと　活りひ



華族女學校卒業生の撮影

明治三十四年七月華族女學校卒業生合作

富士川之眞景



前景

橋元房子

徳川糸子

小出錠子

厚東梅子

江口八重子

中景

永井貞子

山科新子

鈴木なを子

橋

吉岡芳子

愛鷹山

野村末子

富岳

大隅あう子

人物

松平任男子

茅屋

牧野悦子

舟

寺崎いその子

こゝろがら

父上や兄様に叱られることが御座りましても、勿論、口惜しい、恥しい、恨めしいとおもふやふな念慮もおこりませぬ。同じことであるのに、何故なれば、御友達や他所の方に仰しやられると、口惜しがる、焦思る、泣く、遂には、彼の、いつも大事にして手から放さぬ袂をさへ、噛みやぶる、いろ〳〵の所作があつた果が、往來も絶える。のみか。この恨綿々絶ゆる期なからむといふ様に、いつまでも、其の人に對うて、敵意をすつることの出來ない人もあるので御座りませうか。申すまでも御座りませぬ。それは、父上や兄様のは、御信切で、いや、少くとも、此方を辱めおとしめる意志なしに、仰しやるのであるといふことを、よく知つて居るから、何とも思はぬのみか。少し時過ぐれば、却つて、忝くもなるので御座ります。ところで、他所の方や何かに仰しやられると、まづ、自分を辱めるのであらう。自分を毀けやうとするのであらうといふ疑念をおこしやすう御座ります。

これは、たしかに一の弱點でござりますが、人は、これを普通の人情だと申してをります。この疑念がおこりますと、後は、たゞ、口惜しい、恨めしい、悪い、何やかや、心は沸えかへるばかり、いつの間にか、彼は、たしかに、辱め、毀けやうとするのであると斷定して居る。程經つてからは、何といはれたか。其の事からはわすれはて〻、たゞ、辱められた毀けられたとばかり記憶して居るから、天のとこしなへなるも地の久しきも、この恨にはかなはない仕末になるので御座ります。

つまりは、言はれた言葉よりも、言ふ人の意志を邪推するからで、わが心に、猜疑、嫉妬、狭量などの悪徳が潜んで居るからのことで御座ります。考へて見れば耻しいことでは御座りませぬか。

よく、世間で、甘いことには、棚から牡丹餅と申しますが、其の牡丹餅を、棚からではなく、一包は、彼の何時もにこ〳〵して居らしやる大黒様から御貰ひ申し一包は、悪體らしい閻魔から貰らうたが、試して見るに双方も甘味いといふのでさて、皆様で、此の牡丹餅を御馳走になつたとしたら如何で御座りませう。皆様

が空腹じい時で御座りますよ。其の牡丹餅も、双方も、全く、風月で、特別に製へさせた極上の同じ牡丹餅であるのです。彼のにが〳〵しい閻魔づらのくれた牡丹餅、何の甘味いものかと、えう食はずに、空腹さを我慢なさる方が御座いませうか。牡丹餅で不足なら、蒸菓子の上等にしても宜しう御座りますし、ビスケット、でも差支は御座りませぬ。

空腹い時で御座りますもの。遠慮なく何方からだつて頂戴いたします。斯様な場合と。前の事情とを比較して見たらば、如何で御座りませう。何も、閻魔が言つたから、大黒様が仰しやつたからつて、その平素の顔容で推定して、其の意義の善悪を考へずに捨てゝしまふのは、至極、愚しい話では御座りませぬか。況んや之を腹立ち恨むといふ様なことは、畢竟、其の人が狭い上に、猜疑だの嫉妬だのといふ不消化物を澤山食べて居るから、斯様した甘味いものが参つても、頂戴することが出來ぬ。よし、頂戴しやうとしても、直く、吐き出して、飛だ、見苦しい體を人に見せるといふやうなことになるので御座りませう。

たとへ、どんな無實をいひかけられ罵られても、よく心を靜にして、まことに然

樣の事出來ぬやうにと心を戒めれば、つまり、その惡口讒誣も、一つの教訓となるのです。恨むどころか。先方へ關係なしの先方は惡意ありて言うたとすれば此方ひとりのためには恩人で御座ります。すべて、善いことは勿論、惡いことでも其の自分の心からひとつで、皆、わが身のために金科玉條となるものだと申すことで御座ります。よく注意して、日々に與へられる教訓を、無益にすてゝしまはぬやうに爲やうでは御座りませぬか。

天皇命の　知ろしめす。　うつし世こそは　樂しけれ。
出雲の神の　知ろしめす。　かくり世こそは　畏こけれ。
このことわりを　悟りえて。　いつき奉べ　皇と神

布志乃舍　正胤

女四書に就て

細川潤次郎

女四書は、女子修身の爲には好書なり。夙に、我國に傳はりて、國文に飜譯せる者ありて、貴族の女子の婚するに方り、之を携帶せしことも少からず。近來は、飜刻の書數版ありて、余は、嘗て、女子高等師範學校に於て、活字を以て印刷せしめたる事ありたり。是より先き、同學校に於て、此の書に付き、生徒に對して一言せしことあり。其の中に、我　皇后陛下の、此の書を御熟讀遊ばされたる御事迹を述べて、其の詳なることは、纔に出版せる茶橋錄話に見えたるを以て、茲に反復することを要せざるべし。余が、此の書を稱讃するに反し、或る敎育家は、此の書を取らずとの說を聞きたることあり。今日は、其の說を辨駁して、此の書の好書たる所以を示さんとす。或る敎育家の此の書を取らざるの要點は何に在るかと問ふに、左の如く答へたり。此の書にも、語弊少からざる中にも、女誡の中に、卑弱の篇ありて、女子を人類中の卑弱なる者とす。此の意を推すときは、女子は、常に、人にするべき者にして、復、有爲の人となることを得ず。從て、卑屈自ら甘ずるの人とならざることを得ず。これ、此の書の取るべからざる所以なりと。此の言、頗る理なきに非ずと雖も、一體、古書を讀み古書を解して、以て、吾人に利せんと欲するときは、取捨變通することなかるべからず。何等の書と雖も、其の儘に躬行

實踐して、弊なかるべき者は、實に、僅々なるべし。況や、他の國の人、千百年の古に方つて言へる者に於てをや。古書を講ずる者は、須く、其の言を、今日の時態に引當て、其の果して今に用ふべきや否を考へ、其の取捨を決すべし。又、教師の、生徒に對して古書を講ずるが如きは、宜く、其の用ふべき者と用ふべからざる者とを明示し、其の利を取りて、其の害を避くるやうにすべし。これ、讀書學問の要道なり。又、人を教ふるの要道なり。

今、女誡中の卑弱と曰へることに付き、其の弊を擧るときは、誠に、或る人の言ふ所の如き者あり。然れども、變通して之を解釋するときは、其の利も亦當に少からざるべし。余は則言はんとす。一體、一個人は、實に卑弱なる者なり。五尺の身は渺然たる一物にして、其の智力も體力も、共に限りあるものなり。決して、自尊自大にすべからざるものなり。常に、恐懼戒愼せざるべからざるものなり。男女を問はず、貴賤を論せず、己を恃み人に傲るべからざるは同一なり。(或る人は曰へり。富貴の人は、貧賤なる者よりは、更に甚しと。)「モンテスキウ」氏は、其の著はす所の萬法精理に曰へらく、人の恐懼するは、其の天性なり。寒は恐れ、暑を恐れ、水を恐れ、火を恐れ、其の他、百般の災害を恐る故に、以て、身を保つことを得るに至る。若し、人に此の性なからしめば、一日も世に居ること能はざるべしと。蓋し、人の恐懼の性ある所以は、即、人の卑弱なる所以にして、之が爲、戒愼に戒愼を加ふるときは、以て、一切の災害を免るべく、又以て、多數の人を叫合して、強敵を防ぐことを得べく、又之を伐つことを得べし。是に於て、氣質の勇は、變じて、道義の勇とな

ることを得べし。然るときは、卑弱に居て恐懼することは、徒に、臆病に終る者に非ずして、天下の大勇ともなるべき者なり。此の如く解釋するときは、女誡が、謂はゆる卑弱人に下る者は、啻に、其の弊を免るべきのみならずして、恰も、天皇陛下教育に關する勅語の、恭儉己れを持するの恭と曰へる美德に類し、又、皇后陛下の御令旨に、女子は巽順の德を體して、善く父母舅姑に事へ、又其の良人を助けて、善く一家の事を理め云々と曰へる、巽順の德に同じかるべし。豈に、其の語弊あるを恐れて之を取らず、又併せて其の他を取らざるべけんや。



女子の學問

岸田松二郎

修身科　二之下

抑、内に敬ありて外に儀容あらば、心廣く体胖かにして、自から、人の愛敬を受くるに至るべし。如何に智識富贍なりと雖ども、心に敬することなくんば、語默其の機を失ひて、心腸の賤劣を視らるべし。儀容整はざるときは、則ち、事々物々、人の信重を失ひ、自己の地位を卑下するものなり。寡默にして敬あり、言語能く其の機を誤らず、儀容ありて靜淑なるときは、則ち、感化人に及びて、自から、人の師表たるに足るなり。蓋、禮法の科目たる種々ありて、或は、人に接するの心得あり。人と接するにも、上輩に對するあり、下輩に對するあり、客となるの時あり、主となるの時

あり、冠婚葬祭の大禮より、日常食膳の細節に至るまで、凡そ、人として爲すべき作法、備具せざるはなし。現世は、感情の世界にして、理想のために動くもの尠く、却て、感情のために、理想を枉ぐることあるべし。此の感情銳敏なる世態に處し、交際頻繁なる社會に立ちて、無禮無作法なるときは、忽ちにして、人の感情を害ひ、輕擧にして多言なれば、忽ちにして、事を破ること必せり。加之、自己の住する家族に對し、無禮無作法にして輕躁なるは、身を安ずる所以にあらず。禮法の用、既に斯の如くなりとせば、學校教科に、之を加ふること必然の事にして、身体の強健を計るがためには体操あるべく、敬を致し信を盡すに禮法なかるべからず。此の二科なるものは、互に相待つべきものなるに、之を氷炭相容れざるものゝ如く思ふは、謬見と云はざるべからず。身体強健にして、而かも、儀容あり、内に敬ありて、苟くも、放肆の心なく、智識備はりて、臨機に之を活用せば、何くに往くとしてか良妻たらざらん、何くに在りてか淑女たらざらんや。敬ありて放肆ならざるは如何、儀容整ひて躁ならざるは如何、他なし。平素に學び得たる道德的知識を反省して之を行ひ、日常習ひたる禮法を練磨して之を行ふにあるのみ。然るに、近來、予輩の屢々耳にする所によれば、禮法を學ぶも、一の技術を演ずるに過ぎず。日常の動作は、更に之に準據するなし。故に、一の古物保存的演技として視れば可なるも、此の迂拙を以て、繁劇なる現世に實行せんこと甚だ難しと。他方の論者は、又曰く、體操なるものは、身體の健全を計るの方便なりと雖ども、之がために粗暴輕躁の風を馴致し、女子の容儀を損すること大なり。寧ろ、禮法を學ぶの勝れるに如か

ずと。此の二論は、近來、世人が、女子教育に於ける評論の二岐ありとす。然れども、予輩を以て之を視れば、片眼を覆ひて物を視るの觀あるを得ず。惟ふに、非體操論者は、女學生のなせる擧動の傾向を視て、偏に、體操其の物の罪に歸するが如く、非禮法論者の視る所は、單に、女學の練習足らざる擧動の傾向を視、又、日常容儀の上に著れざるを視て、罪を禮法其の物に歸するが如し。必竟、此等の婦人の行爲に發する現象に誤らるゝものなくんばあらず。上に述ぶるが如く、體操の目的たる、偏に、身體運動のために外ならざるが故に、只々、其の時に於ける活動行爲に止まるべきものにして、恰かも、兵士の戰時に於ける行動に例すべきものなれば、之を以て、平時靜粛なるべき場合に用ゐんとする女子其の物の誤見あること明なりとす。運動場に於ける行動は、假令鞦韆を試み、ベースボール乃至はクリケットの類を演ずるも、決して、女子淑德を賊ふものにあらず。運動場以外の場所に於て、殺伐奔馳の輕擧に出では、之、即ち、體操運動の罪にあらずして、之が行爲をなせる女子其の人の誤見より釀出せるものなり。豈に又、他あらんや。禮法實習の時に當りて、牛歩蝸行を咎むるもの、演習者其の人の罪にあらず、又、禮法其の物の罪にもあらず、又、順序次第の複雜なるは、事物の當を失はざらんがためなり。然るに、之を視て、遲緩となし、或は之を迂疎となし、以て、繁劇世態に處するの道にあらずとするも、是亦考慮せざるべからず。如何に頻繁複雜の世態と雖ども、常に火事場の如きものにあらず。禮を盡し、敬を致すの餘地なきものにあらず。世の複雜となるに隨ひ、益、其の秩序を正うし、其の宜しきを制せざるべからず。禮法なるも

のは一は其の宜しきを制すべきものなることを聞けり。然るを、之を略し、或は之を闕如して、無禮無作法に流れんか。高等動物たる人類の價値何くにあらんや。況や、家庭の教師たり、天然の教育者として、女子を養成すべき女子に於てをや。然るに、實習未だ完全ならざる女子の行動を視て、遲緩なり、迂遠なりとなす。是迷へるものなり。凡そ、何れの業も、練熟の功を積みて、敏速となるものなり。彼の文字を習ひ、繪畫を學ぶものを視ずや。其の初めは、皆、甚だ遲鈍にして且拙劣なるものなり。然れども、其の既に熟するや。筆端敏速に活動し、而かも、其の文字に繪畫に、皆各生氣あるにあらずや。然るを、練習の際に於て、遲緩鈍筆を憤り、直に、之を廢せんとするは、愚も亦甚しからずや禮法演習の未熟期に於ける、亦猶此の如し。果して然らば、斯種の論者は、只其の眼を廓大にし、其の微細に入り、系統を立て丶、予輩の所見に高教を垂れられんことを希ふものなり。

上來陳ぶるが如く、世間の女子を視るもの二種あり。予輩は、女子の學問なる問題の下に於て、上陳の如き論駁に類する文字を臚列するは、誠に、問題外の事に屬するを知れり。然れども、世間、既に、斯の種の疑問を發する所以は何ぞや。修學修得の聲名を有する人々にして、此の疑問の種子を播くが如きものなきにあらずと聞けり。予輩は、世間論者の眼光は、放ちて、細微に教育ある女子社會の光景を觀破せんことを望むと同時に、教育を受けたる孃等の、既に學び得たる禮法を行住坐臥に實行せられ、體操遊戲に於ける動作は、日常行爲の上に著はすべきものにあらざることを自覺し、體操禮法兩ながら行れて、相戾らざることを、

世間論者に確認せしむること、偏に、雖等の云爲如何に存するを以て、故さらに、之を引援提論したるなり。

之を要言すれば、修身科に於て得たる道德的智識を確認し、之を以て、行爲の鑑戒指南事となし、又、禮法を平素に自省して、容儀の整齊を期待し、彼の教場的禮法として、演技視することなくんば、即ち、識德兼備の人となるべきこと明かなり。

學問の價値

眞邊榮次

我が邦人が、久しく封建制度の桎梏に苦められ、自由の眞意義を解すること能はざりし結果、中流以下の婦女にして、文字を解するものは、實に曉天の星にだも及ばざる有様なりき。從つて、今日に於いても、猶、教育の價値を無視して、學問の研究は、却つて、人の品性を下劣ならしむるものの如く、思惟せるものなきにあらず。これ云ふまでもなく、謬見の甚しきものなるが、退いて深く考ふれば、此の言を發する所以、また、決して、ゆゑなきに非らず。余は、啻に、女子のみとは云はず、男子に於いても、家庭時代より學校期の初期に於いては、天眞爛熳として一點の邪念なく、よく父母の言を聽き謹愼にして從順、眞摯にして率直、其の情操、誠に、愛すべきものなりしが、高等小學門より、中等教育門に進むに至るや、昔日の性格漸く變遷して、父兄の無學を蔑如し、愚痴あり、昏迷あり、時代後れありなど、多くの忌忌しき代名詞を冠して、嘲罵痛嘆するもの、まゝあるを耳にす。豈、慨嘆の至りならずや。蓋し、因襲の久しき、多年持續せる慣習は、一朝にして

打破すべからざれば、それ或は然るものあらん。然れども、これあるをもて、無限の鴻恩を蒙れる父兄に對し、かゝる暴言を發するが如きは、實に、余の忍びざる所、殆ど、禽獸と相去ること遠からざるものと謂ふべし。余竊に以爲へらくかく、外部に向ひて、不平と苦言とを發せんより、寧ろ、退ひて沈思瞑目、靜にわが良心の判斷を請ひ、果して、正しきや否やを反省するに若かざるべしと。何となれば、今の學をなすものを見るに、口には五倫を說き、人道を談じ、其の議論頗る明晰深遠にして、彼の前賢往哲と雖、猶且、言はざる所の眞理を闡發するものあり。されど、そは唯、言論上のことのみにして、具に其の諸行の如何を審判すれば、其の理論と實行とが、相背反するに喫驚せずんばあらず。かゝる徒は、日に萬卷の書を讀み、其の識は古今を超越し、學は東西を網羅すと雖、眞に之を稱揚するの價値を見認めんや。余は、寧ろ、疇昔、婦人が女大學等の如き小冊子により、能く婦人の道德の大綱を識知し、能く父母に孝に、兄弟に友愛に、夫婦相和し、春風の如き家庭を營み、和氣藹然團欒相樂しみ、只管實行をもて、學問研究の第一義となしゝを勝れりと思はずんばあらず、今や諸媛の多くは、高等小學校を終へ、高等女學校の階段にあり、其の學ぶ處の智識は漸く高尙となり、年齡もまた增加せり。其の學修せらるゝ學科より云へば、基本的學科（讀書、算術、道德的學科を云ふ。）の上に、知識的學科（自然科學、精神科學。）並に、諸種の技能を硏究されつゝあり。是等の學科や技能は、實に、諸媛をして、文明的婦人として、健全圓滿なる妻母として、諸媛の人格をして、一段光彩を發揮せしむるものあり。之を封建時代の敎育法に比すれば、一頭地を

抽ける進歩的教育法といふべし。されば、諸媛は、この際に當り、眞によく理を解し、自ら内に省みて精神の修養を努め諸徳を行ひ、人生の眞相を意識するは、最も、諸媛に必要なることなるべし。

試に、深夜闃として萬籟收まれるをり、明滅する孤燈のもとに靜座して、徐ろに、人は何故に教育を受けざるべからざるか修學はいづくに歸着すべきか。また、人は何をなすべきか等の問題を熟慮せられよ。これ實に、諸媛が、人の人たる所以を自覺する所以のものなり。貝原益軒先生嘗つて云へり。

人生而不レ學、與レ不レ生同。學而不レ知レ道、與レ不レ學同。知而不レ能レ行、與レ不レ知同。故爲レ人者必不レ可レ不レ學。爲レ學者必不レ可レ不レ道。知レ道至難。自レ古英才敦行之士不レ爲レ不レ多、然知レ道者鮮矣。學問思辨之功所ニ以不レ可レ闕也。

此の言や、實に、余が云はんと欲する所を言ひ盡せるものにして、千古の至言と云ふべし。

之を要するに、人の人たる價値は、智識にあらずして、唯、之の有理に使用し、圓滿に實行するあり。故に、諸媛は、この修養時期に於いて、正確なる智識を獲得せられ、家にありては能く父母に事へ、兄姉を敬ひ、弟妹を愛し、出でゝは、朋友に信義をつくし、自ら、無教育なるものゝ模範となり、もて、婦人の美徳たる謙愼、貞淑、寡言等の諸徳を守られ、益、婦人の本分を盡すに吝なるべからず。之を忘れて、生意氣なり、多辯なり、輕薄なりなど、人に爪彈せらるゝ振舞なかるべからず。

朝貝や咲初めしより秋の風　櫻民



日本女訓（未定草）

川崎重陽

十二、平生、よき書を選みて讀むべし。品格卑き新聞雜誌、および、猥褻なる小說の類をば、必、手にすること勿かるべし。およそ、野鄙なる書を讀まば、本心、おのづから、みだれて、知らず識らずの間に、正しからざる感化をうけて、つひには、一生をあやまるにも至るべし。かゝる例、世に少からず。愼むべきことなり。

十三、日常親しき仲らひの談話にも、近隣の非をそしり、又は、他人の短所をわらふなどの事をば、かりそめにもすべからず。かゝることは、たゞに、人を傷つくるのみならず、また、大に、己の品格をも、おとすものなり。又、みだりに、高聲高笑などするはよろしからず。

十四、他人のよきことを見ては、之を嫉み、おのれ、少しく優る事あれば、たちまち慢心するは、心せまきものにありがちの事なり。もし、この病念きざすことあらば、才藝をも、智德をも長ぜしむること能はざるべし。されば、常々、深く、心を用ゐて戒愼し克く己の工夫を怠るべからず。

賢婦るむ子の傳

指原乙子

今を去る事九十余年前、德川幕府の旺盛なりし、

文化文政の頃かとよ。世に比類なき賢婦よと、知ると、知らぬの差別なく、言ひ傳へ、聞きつぎて、もてはやされし美濃部るむ子が、其の行を尋るに、是より先き、旗下八萬騎と稱へられし、その中の一人なる、美濃部伊織と云ふ者あり。先つ年、安房國朝夷郡眞間村の、内木四郎右衛門が女るむといへるを妻となせしに、彼女は心操いと優しく、姑に事ふる事懇に、身を謙りて夫を敬ひ、眞實やかにかしつきしかば、夫婦の中も殊に睦しく、程なく男兒をあげしにぞ、いとゞ喜びの數そひて、樂しき月日を送りけり。

伊織は、兼て、大番組といへるに勤めしかぞ、明和七年の春、京都なる二條城の在勤を命ぜられしにぞ、老いにし母、いはけなき兒を、るむ子に托ね、留守の事何くれと打かたらひて、僅か一年ばかりなれば、歸り來む日を待ち給へとて、俄かぬ袂を別ちしが、是ぞ親子夫婦が永き別れの首途なりしとは、神ならぬ身の、知る由ぞなき。

これより、るむ子は、いとゞなほ、萬の事に心を配り、夫に恙なき樣うと、明暮心にねがひつゝ、老いにし人に物思はせじと、わざと樂しげにかにかくと物語りては慰めつ、いはけなき兒のわづらはぬやうさまぐ＼心くだきつゝ、人しれず彼方の空をながめては、夫の便りを待つ甲斐もなふ、或日親族の某、あわたゞしく入り來るに、何事ぞと胸轟かせば、こは如何、夫は彼地へ至りし後、日毎の勤怠りなく、心正しき人なれば、組頭にももてはやされしを、嫉める者の誰彼、わざと事を構へて、滿坐の中にて嘲哢せしかば、怒りに耐へ兼ね終に對手を殺害せしにぞ、場所柄をも辨へず、不屆の仕打とありて家祿を召し、士籍を除かれ、越前の丸岡藩へ、いつをはてとも知られぬ禁錮の

身となり果しと、聞くよりはつと胸つぶれ、伏沈みしぞ道理なれ。されど、元より雄々しきるひ子なれば、やがて、心を取なほし、かくなり果し上からは、此の儘にてあるべきならねばとて、やをら家財を賣代なし、幼きものを背に負ひ、老いにし母をいたはりつゝ、花の都を跡になし、心細くも古郷なる、眞間村さして旅立し、心の內いかなりけむ。思ひやるだに哀れなり。

かくて、やう〳〵にして、眞間村につきしかば、さゝやかなる家居を購め、かたばかりなる家財調へて、此處に仮の住家をさだめ、村の女兒どもに、裁縫わざを敎ふる暇には、己も、亦、裁縫をはげみつゝ、母に孝養怠らねば、こを見聞たる村人ども、其の行に感じけむ。或は鮮けき魚とりしとて送れば、又畑物の實のりしとて、心を付つくる忠實さに、足らはぬ中にも心安く、二年三年と過ぐる内も、夫の上のみ安かれと、願ふ心の暇なきに、いつまで禍のうせぬにや、夫の紀念と明暮に、心をつくし育くみし兒の、不圖重き天然痘にかゝり、醫藥のしるし更になく、終に敢なく世を去りしかば、積る歎きに、老の身の今はやう〳〵病みがちになり、是さへ敢果なくなり果しにぞ波風とゝろき太洋につながる舟の今は只、行べき方も知られねごと、深き歎きに沈みしが、きつと心をふり起しまだ老朽し身ならねば、何方へも嫁して、身の行末をはかり玉へと、進むる辭を耳にもかけず、母といとし兒との白骨を攜へて、又も都へのぼり來つ、美濃部家代々の菩提所なる、谷中の某院へ納め跡懇に弔ひけり。

かくて、るひ子は、黒田家へ、由縁をもとめて、宮仕の身となりしが、かばかり心愛たき女なれば、深く夫人の意に叶ひ、何かれと、心をつけて賜はる

ものも少なからぬを、いと約やかに貯へ置き、美濃部家代々の祀をば、更に怠る事もなく、三十餘年の久しき間、いと忠實に事へしが、最早七十路にもなりしかば、身の暇を願ひしにぞ、數々の賜物を給ひて、古郷へと立歸りぬ。

さるに、其の翌年伊織は、やう〳〵釋されしが、彼の浦島のそれならねど、四十余年の其の間、禁錮し身の今は將、ありし家居は人替りて、妻子の行末も定かならねば、兎にも角にも、祖先の墓に詣し上、不孝の罪を詫びなむもの、然るにても、さこそ荒れ果てしならむなど、さま〴〵思ひ亂れつゝ、手向の水を汲み上げて、墓地へ至れば思ひきや、いと淨らかにかき掃ひ、手向し花さへ生々たれば、こは不審し、如何なる人のかくせしぞと、思ひ惑ひて急しく、住持に會はむと御堂に至れば、こは珍しや美濃部氏、さても、御身は善き妻を持たれし人よと、老僧るむ子が年頃の艱難辛苦より、去年古郷へ歸りし事、そが旅立の折からも、數多の黄金を寄附なして、美濃家代々の祀の代とし、恩に賴み聞へし事ども、いとも委に物語れば、伊織は感涙とゞめあへず、直に赦免を受けし由、るむ子が許へ報せしに、取るものもとりあへで、るむ子は急ぎ都へ出で、絶て久しき對面に、語るも聞くも涙なり。

さても、るむ子は、年頃貯へ置し金子もて、新に家具を調へつ、こゝにやう〳〵偕老の道を全ふせしは、實に伊織七十二歳、るむ子七十一歳なりしとぞ此の事幕府へ聞えしかば、其の貞節を嘉みせられ、白銀十枚を賜はりしは、文化六年なりしとなむ。



衛生上に於ける看護法の一班（承前）

久我西英

（チ）心動、脉搏體温　患者の心動を撿し、時々脉搏を數へ、且つ體温を測りて、其の成績を醫士に報せざる可らざる場合あり。體温は、撿温器（「マキシマール」撿温器）を以て撿すべし。而して、其の法は、患者の腋窩を善く拭ひ乾かして、撿温器の水銀球を挿入し、腕を體に接せしむべし。而して、大約十分時を經たる後、水銀柱の昇點を撿し、尙ほ二分時間挿入して、其の更に昇騰するや否を再撿し、若し、此の際、前に比して、少しも昇騰せざるときは、之れにて止む。撿温に先ちて、撿温器の水銀柱は、三十六度以上に在るや否を確むべし。若し、此の度以上の處に在れば、撿温器を振動して、水銀を低下せしむべし。

（リ）患者の排泄物、灌腸、及び腸注入法　患者の兩便は、醫士の命に依り、或は命なきも、異狀を呈するときは、之を貯へ置くべし。（必ず室外に）若し、兩便正しく通ぜざるときは、之れを醫士に報告すべし。患者病床を去ること能はざるか、或は之を禁ずる場合には、温めたる便器或は尿器を給し、且つ通利の際には患者を支ふべし。若し、此の際衣類を汚染せば、必ず之れを交換すべし。又、兩便失禁の患者に在りては、其の勘を取り、時々便器を給すべし。

便通を促すには、灌腸器を以て灌腸を施すか、或は「イルリガートル」を以て、腸注入法を施せば、更に佳良なりとす。

（ヌ）嘔吐　繃帶の注意、患者の營養　患者若し嘔吐をなせば、體を起し頭を支へて之を扶くべし。可及的、嘔吐刺戟を忍耐せしむれば、嘔吐早く止み且つ乾嘔を鎮靜するの效あり。嘔吐後には、口腔及び鼻を清潔にし、且つ、少量の清凉飯料を與へて、爽快ならしむべし。而して、吐出物は、次の回診まで貯ふべし。

特に注意すべきは、患者に施したる繃帶にして、若し其の不整となりたるを發見せば、法の如く矯正すべし。若し、繃帶速に赤色となりたるときは、其の部の出血あるを以て、速に醫士に報告すべし。

又、患者に對し、甚だ緊要なるは營養の良否なり。醫士の命に背き、注意を怠るときは、病の經過に非常の害を與ふることあり。故に、飲食物は、醫士の命令以外には、一も與ふべからず。

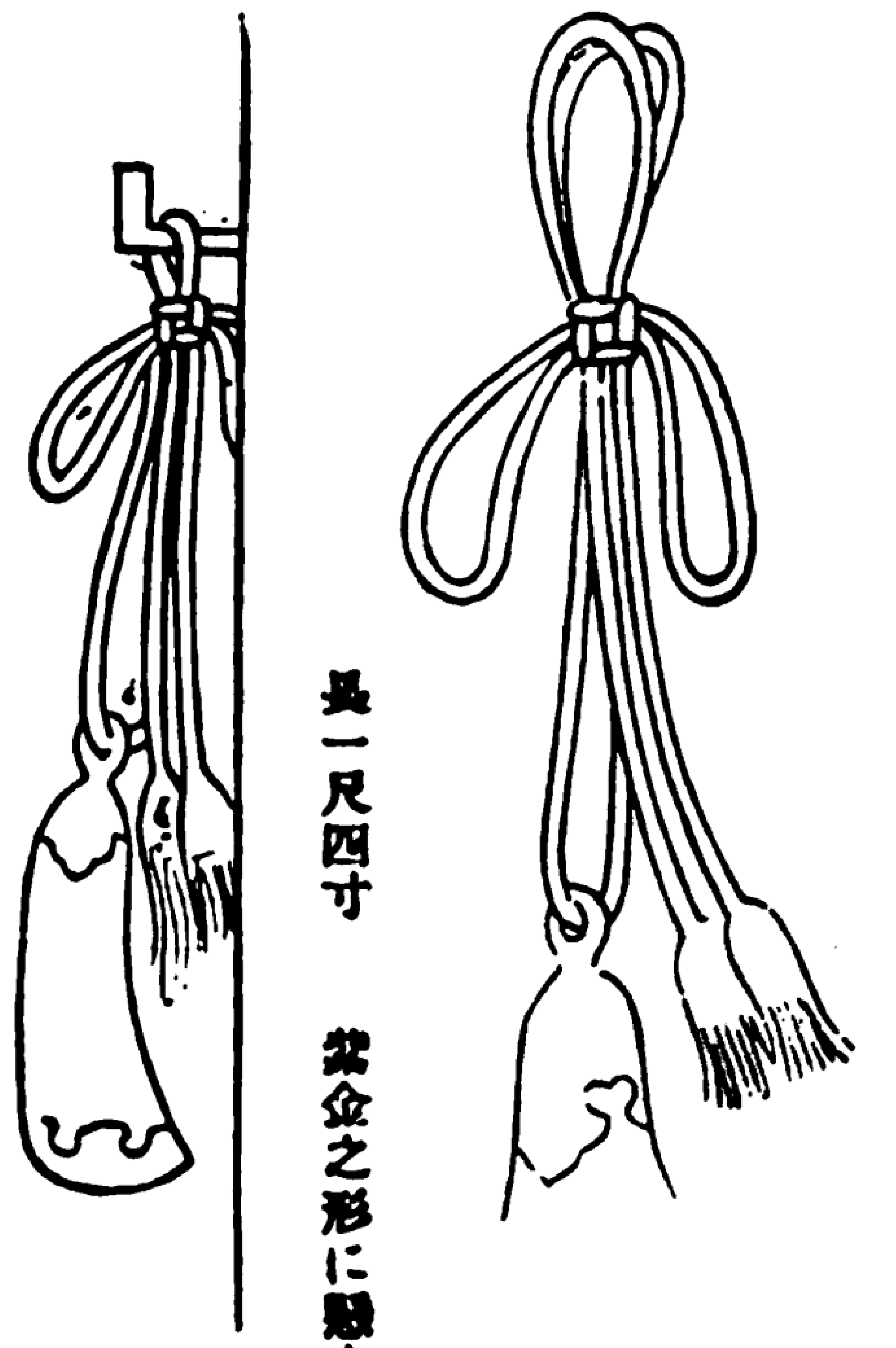
上卷結び

石井泰次郎

（九）角の上卷

是は、鏡の裏の緒と共に、雜要鈔に見えたる圖あり。結方も同じことなり。されど、正しき圖をとて此に別ちてあげつ。幔の圖に柱二所に掛けられたり。

上卷丸緒　口徑三寸五分口以銀打覆塗黄打
海浮文の堺金物口覆糸金等料理
角造沉又次は以榎造天燒金して牝黒天盤天鵝之
金案永久六年中宮立后時賓鼻角二枚被用之



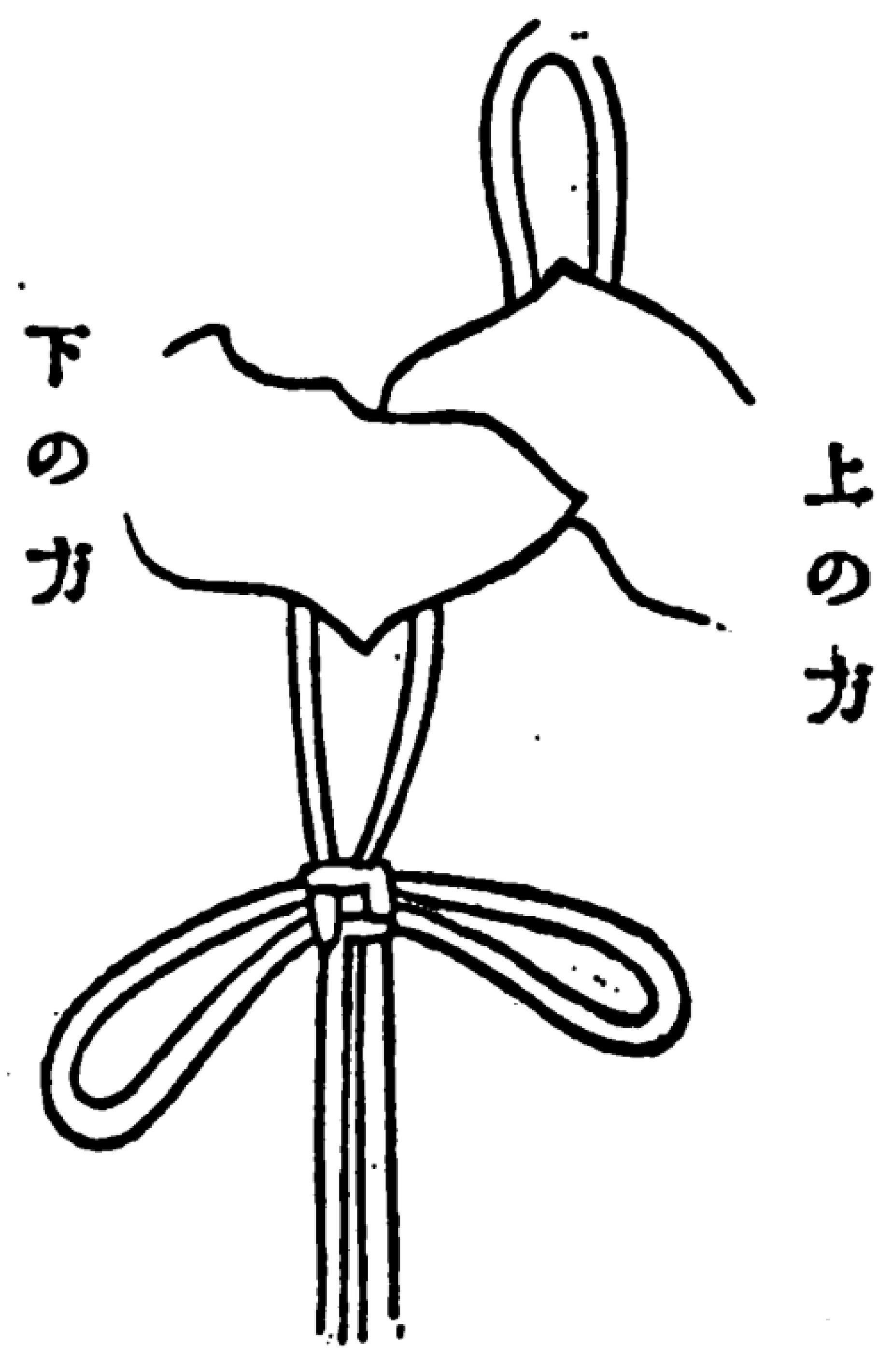
○この結様は、種々の調度に用ひらるべき結方なり。此の用ひかたの一種として、懸物圖鋭所載の物に犀角、(圖は、右の圖より寫せるなり。)もろ〳〵の毒を消ものゆゑ、座鋪の飾に用ゐるなり。

堂上にては、御帳の左右に懸らるゝよし。

犀角は、たやすく得られざる物ゆゑ、沈香にても造り、又、榎にてもつくる。又、此の角に海浮をきざみ、あるひは、紅紫の糸にて網をすき懸るあり。

又振々　(圖畧之)

是は、悪魔をよくる物とて、年始に童子の翫にするなり。又、座鋪の飾にも用ゐるとなん。ありといへども、共に、上の掛緒を一ッにゑがきたるは、正しからぬなり。中にも、二ッのはかに載せたる鋭の圖は、其の側にものせる詞に、鋭を懸る事、深き習有るよし。堂上にては、御帳の左右に懸らるゝゆゑ、下々にては、床飾に用ふるとも、一ッ掛べしといふ付床の上座の端に懸るなり。丸鋭をも掛ると云ふ。とありて、圖をのせたるが、大きに亂りある形なり。八花形の鋭は畧して、其の上下の緒の様を左にのせむ。



だいどころ

鳥はんぺいのしかた

此のはんぺいも、前位の鳥の肉を用ゐ、是を、すこし火どりて、すり酒、しやうゆ付て、さて、寒晒の粉をすこしいれ、玉子の白味をいれ、つぎにだしをいれて、ひめのりのすこしやはらかにすりて、また、右の内へいれ、よく〳〵すりのべ、肉を茶わんにいれ、むして外の器にいれかへて、葛あんか、また、わさび味噌か、さんせう味噌か、また、梅仁みそには、すこししやうゆに酒を入れのばし煎て、かけいだしてよし。右茶料理にもよろし。

煎鳥のしかた

雁か、鴨か、薄味噌にてよく煎て、其の上へ、醤油をさし、敷鰹をいれて出すべし。

鳩のはぶし煎の仕方

鳩にても、何鳥にても、右、骨を澤山にたゝきいれ、花鰹をいれ、酒としやうゆとを等分にして、汁をすくなめに、すこしはくつくほどに煮上げ、また、外の鍋に、わさび味噌をあたゝめおきて、其の中へいれ、そのまゝにても、又は、ゆにかけても、風味よろし。

大根栽培法

こ、た、生

大根は、萊菔又た蘿蔔と稱す。我邦にては蔬菜用

として煮食する外に、漬物として珍重し、又た、切干類としても賞用せらるゝものあり。

（大根の種類）　大根は、温帯より熱帯地方に産し、普く寒冷なる氣候に堪へ大なる肉根をなすに足るものにて、其の品種は、蓋し多かるべきなり。其の中稀品とも云ふべきは、印度産長角種、及び埃及西班牙産の油用種等なりとす。本邦にありて通俗なるは夏土用後播種し、秋作として十一月頃收納する、秋大根にして、尤も良品を産す。種類は先づ、四種にして、

（一）秋大根

（二）二年子大根（越年生）



方領大根



聖護院大根

（三）時なし大根

（四）二十日大根

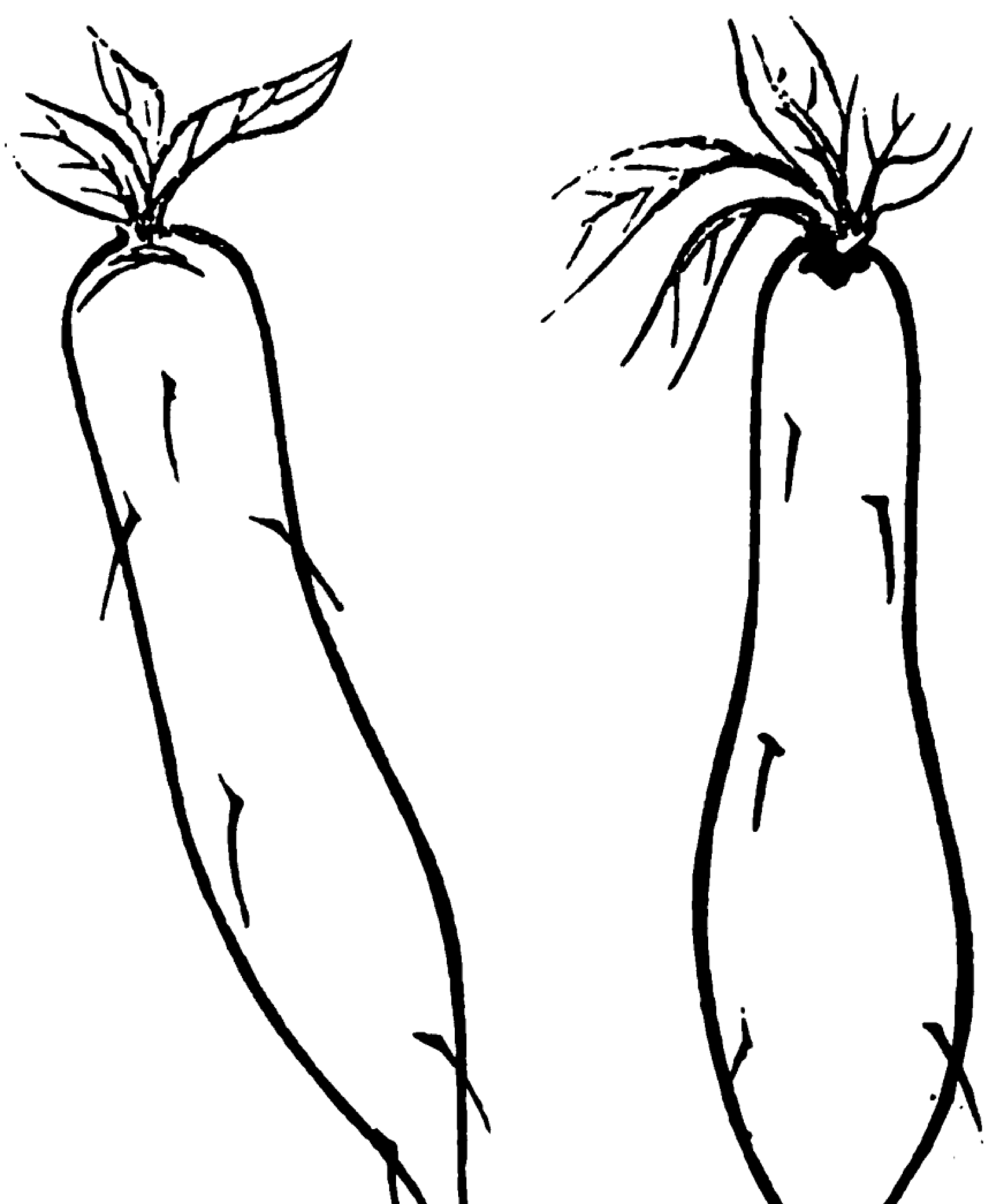
秋大根の中にて著名なるは白色種に宮重大根、方領大根、櫻島大根、練馬大根、聖護院大根、波多野大根等にて、又た、尾州の氏永大根、阿原大根、澤庵大根、大阪邊の倉橋大根、近江の鼠大根等あり。紅色種には、肥前の女山大根、忠六大根、大隅の燕口大根等あり。二年子大根と云ふは、三月大根ともしようし、秋蒔きて春收むるもの、時なし大根と云ふは、秋及春蒔きて、随時用ゐるを得べく、東京の細根又た亀井戸大根は、此の種に屬し、第四の二十日大

根と云ふは、成熟頗る速に、隨時作りて、食用に供するを得べきものなり。

(栽培)　大根栽培に適する土質は、膨軟にして輕鬆なるべく、殊に、壌土等の深厚なる沃土にありて、能く美大なる根を産するを得べし。彼の宮重大根の産地なる、尾張西春井郡落合村の風土を考ふるに、地は五條河流に跨る一の小字にして、昔時、幾度か該川の氾濫により、今日の沖積土をなせるものゝ如く、地質は肥沃なる砂質壌土にして、下層は、土地により異なれども、凡そ十數間以下に至るまで、細砂よりなく、往々、砂石を混ずるなるのみ。而して、耕土は黒色有機質を混合すと云ふ。

以下述ぶるは、秋大根栽培の大要に過ぎざれども、其の他の二年大根、時なし大根、廿日大根の栽培は、之に準して可なるべし。大根は麥の跡作又は里等瓜類の收獲後、或は藍杯を作れる場合には、其の間作となすなり。即ち、先づ、丁寧に圃地を耕鋤し、前作を收め終れるときは、其の根株等を去り、極て膨軟ならしめ、(藍を作れるときは、其の畦の一側を、手杷にて能く杷樹し、土を細砕して之を他側に寄せ掛けて畦を作るべし。)大抵、一尺八寸の外に畦巾を整へ、畦上に一尺五寸位隔てゝ足跡をつけ、其の中央に、棒にて穴を穿て、内に肥料を與へ、(大豆、粕、鯡糟、堆肥糠、下肥、油糟類。)穴の前後に種子十粒許りを下し、土を被ひて、強く鎮壓すべし。種子に覆土せんには可成薄かるべく、通例一分乃至二三分なり。而して、播下後暴風雨に遇ふか、又は、日光の強烈なる射照を蒙るときは、藁類にて覆ひをなす。播下期は通常二百十日より二百廿日迄に播き終るを以て、味良く品質好きものを得べしとなす。要するに、大

根種子は、九月中には遲くも蒔き終らざるべからず。（播種量は、一反步四合常位なり。）種子は、天氣都合によりて差あれども、播下後、一日乃至二三日にして發芽すべし。されば、發芽後三日を經ば、第一回の間引をなすべし。一足跡の塲處に三四本を殘す位にして、其れより二週間も經ば、第二回の間引を行ひて二本を殘し、又た二週日も經ば、第三回間引をなし一株一本たらしむべし。此の時、この根部は、最早拇指大となり居るなり。間引く時には、強壯なるものを選みて殘すべく、又、其の葉色の濃厚



練馬大根　宮重大根

なるものは之を除く。之れ二股又は鬚根多き根部を生ずるが故なりと。蓋し、根部に、徒に鬚根のみ多きか、又は、二根を生ずる如きは、根の養分吸收盛にして、葉色を濃厚ならしむるものあるならんか。

大根は、播種より間引きを終るまで、屢々、中耕施肥し、風雨ありし後は、注意して株を保護し、生長盛なるに至れば、土寄せをなすなり。

大根に施肥せんには、砂地の如き養分流去の恐れある處の外は、大抵は、原肥に多分を施し、發生後時に、稀薄なる下肥を

數回施す位なり。彼の木灰燐酸肥料などは、窒素肥料に混和して與ふれば、必ず其の効を奏すべしとなり。

(病虫害)　病菌には紋羽病(ベト病)あり。他に、網被病、黑理病あり。虫害には、大根の青虫(蛾)あり。青ノミムシ、黑サンシヨウムシ、黃線サンシヨウムシ等ありて、或は、稚苗を害し、又た葉を蝕害す。其の他、大根の害虫には、根切り虫、夜盜虫、蚜虫等あり。而して、此等病虫害を豫防驅除せんは、誠に大切なることなり。園圃に栽植せるものにありては、注意を周到にし、畦圃を清潔にし、及び、手入れを綿密にせば、恐らくは、病虫害の發生を見ることなかるべきも、若し、其の害を受たる後に於ては、病菌株は、猶豫なく取り集めて燒棄て、後年の災を防ぎ、虫害にありては、害虫の採收燒棄と驅虫液劑を灌ぎ、又は散布することを力むべきなり。

(收穫)　秋大根は 早きは秋土用頃には收穫に適すれども、通例十一二月頃、根の充分に發育したるを見計ひ、拔き取るべし。例ひ後るゝことありとも、冬至までには全く收穫し終るべし。然らざれば、徒らに、莖のみ生長し、品質は漸く不良となるの失あるを免れず。(温暖なる櫻島地方にては、一二月頃收むるなり。)

大根を貯へんには、乾燥なる圃地を選び、掘り起し斜に埋めて葉先きを表はし置けば可なり。寒冷なる地にて、其の凍結を防がんとせば、稍根部を乾し、後、乾きたる地を二尺餘り堀り、下に、厚く藁類を敷き、其の上に大根を積み、再び藁類にて被ひ、厚く土を覆せ、更に雪除けとして粗屋にても設くべし。

(製造)　漬物用には、丸き儘繩にて編みて乾す

べく、又、切りて干すには、千切干、甕切干、輪切干、鹽切干、割干等あり。適宜に切りさき、又は鉋様のものにて衝き下ろし、冬期寒風に乾燥して、製造するあり。切干の乾燥は、冬期寒風の吹き荒む處にて干せば容易なるべく若し又た、夜を越すときと雖、其の儘放置して可なり。只雨に遇はしめざる様にすべし。



國文學講義

井上頼文

紫式部日記講義（十九）

人げおほくこみては、いとゞ、御こゝちも、くるしうおはしますらんとて、みなみおもて、東おもてに、いださせ給ひて、さるべきかぎり、この二まのもとにはさふらふ。

とのゝうへ、さぬきと、宰相君、くらのみやうぶ、御几帳のうちに、仁和寺のそうづの君、三井寺の内ぐの君も、めしいれたり。

とのゝ、よろづに、のゝしらせ給ふ御こゑに、そうも、けたれて、おとせぬやうなり。

いま、一ざにゐたる人々、大納言の君、こ少將の君、宮のないし、辨の内侍、中務の君、たいふの命婦、大式部のおもと、殿のせんじよ、いと、としへたる人々のかぎりにて、心をまどはしたるけしきどもの、いと、ことわりなるに、まだ、見奉りなるゝほどなけれど、たぐひなく、いみじと、心ひとつにおぼゆ。

○ひとゞ　ひとつあるうへに、今、ひとつ添はることをいへり。こゝは、中宮の御產の氣になやませ給ふ、そのうへに、かく人氣おほくたてこみては、いよ〳〵御こゝちも苦しくおはしますらんとての意あり

○みおみおもて、東おもてに南面の間と、東面の間となり。南の下に、もと、おもての三字あし、今一本に依て補ふ。

○いださせ給ひて　女房どもを、いだしやり給ひてあり

○さるべきかぎり　さるべきは、さもあるべきにて、中宮の御前ちかく、かあらず、さふらふべき女房ばかりを、の意なり

○このふた間のもとにさふらふ　このふた間は、前文に「北の御曹司、二間はあちて」とある、その間をさせり。すなはち、しかるべき女房ばかりを、このふた間に、とゞめ給へるなり

○とのゝうへ　道長公の北の方、倫子をいふ

○さぬきくらのみやうぶ　讃岐、內藏命婦　いづれも女房のよび名なり

○御几帳のうちに　中宮のまします、御几帳の內にあり

仁和寺の僧都の君　類本の傍註に、濟信とす

○內ぐの君　內供は、內供奉の略稱にて、僧の職名あり

○めしいれたり　濟信と、內供の君との兩人をも、御加持のため、御几帳の內に候はしめ給へるあり

○とのゝ、よろづに、のゝしらせ給ふ御聲に　道長公の萬事につけて、指揮したまふ御聲にあり。御愛女ある中宮の御初產の御事ゆゑ、心もいらだちて、何かと、さわがしきまで、さしづ

し給へるなり。こゝの、のゝしるは、罵詈(ばり)の意にはあらで、さはがしきこゝろあり

○そうも、けたれて　僧の讀經(どくきやう)の聲も、道長公のさしづし給ふ聲に、打ち消されてあり

○いま、一ざにゐたる人々　更に、此の外の一座に伺候したる人々あり

○殿のせんじよ　殿は道長公なり。殿上にて、道長公の取次(とりつぎ)などをする女房をいふ

○いと、としへたる人々のかぎりにて　年久しく宮仕(みやづかへ)をもして、なれたる人々のみあるに、の意なり

○心をまどはしたるけしきどもの　もの馴れたる人々が、何れも、いかゞはせんと、心配し居るありさまなどの、といふ意なり

○いと、ことわりあるに　至極(しごく)、尤もなるに、なり

○まだ、見奉りなるゝほどなけれど　式部は、中宮に宮仕(みやつかへ)して、まだ、おひもなく、いわゆる新參(しんざん)ものなれど、の意なり。そもそも式部の、この宮に、みやつかへのはしめは、寛弘三年の十二月二十九日なり。そのよしは、下の、寛弘五年十二月の條に　しはすの、廿九日にまゐる、はしめてまゐりしも、こよひのことぞかし

と、見え、

また、おなじ六年の條に

をとゝしの夏ごろより、樂府(がふ)といふふみ二くわんをぞ、しどけなく、かうをしへたて聞えさせて侍るも

と、見えたる、をとゝしの夏は、寛弘四年の夏なればなり。

さて、久しく宮仕へして、年經たる、この人々

の、心をまどはしたるは、ことわりあり。我身は、まだ見たてまつりなる丶程なきだに、この御ありさまの、たぐひなく、すぐれてめでたくおもはる丶につけて、共に心配せらる丶との意なり

譯解

かやうに、人が多く立ちこみては、ます〳〵、中宮の御こ丶ろもちがわるく御なり遊ばすならんとて、つどひたる女房どもを御前の南おもての間と、東おもての間とに、いだしやり給ひて、さて身分がらのよきものばかり、此の二間には伺候す。

道長公の北の方(倫子)と、讃岐といふ女房と、宰相君といふ女房と、内藏の命婦といふ女房と、中宮のまします、白き御几帳の内に坐し、仁和寺の僧都の君と、三井寺の内供奉の君とを、御もの丶けを祓ふ御加持のため、この内に召し入れられたり。

また、殿(道長公)は、御愛女なる中宮の、御初產の御事なれば、萬事につけて、心いらだち、さわがしきまで指揮したまふ御聲のさうざうしさに、僧侶が讀經の聲も、打ち消されて、音の無きやうなり。

今、此の外の一座に居たる人々は、大納言の君、小少將の君、宮の内侍、中務の君、太夫の命婦、大式部のおもと、殿の宣旨などいふ女房たちにて、いづれも、キツウ年久しく宮仕へしたる人々のみにてあれば、かやうに御產の事を心配する有樣などの見ゆるは、實にモットモなる次第に、式部は、宮仕へをして、まだ、間もなく、御なじみもなき程の新參者なれど、中宮の御產をば、外にくらぶるものなきまで、たゞ、一

心に心配せらるゝ事よ。これ、まったく、中宮の御徳のすぐれさせ給へるによりてなりけり。

漢文學講義

佐々木天游

英一蝶傳

角田九華

英一蝶。本氏多賀。攝津人。遷二居江都一。初學二畫狩野安信一。稱二狩野信香一。後又復二本氏一。更二名長湖一。號二翡翠翁一。別號二曉雲北窓翁一。畫風爲二一家一。名高二一時一。性豪放。而事レ母致レ孝。元祿中。有レ故。謫二於八丈島一。恒貽二畫母許一。使二衣食一無レ乏。居數年。得レ反二江都一。其遇レ赦時。會視二一蝶止二草花上一。由レ是更二姓英名一蝶一。其畫益行。與二俳歌人其角一。親善。享保九年。七十一歿。子信勝。號二一蜂一。亦善レ畫

英一蝶。本氏は多賀、攝津の人。遷りて江都に居る。初め、畫を狩野安信に學ぶ。狩野信香と稱す。後又本氏に復し、名を長湖と更め、翡翠翁と號し、別に曉雲北窓翁と號す。畫風一家をなす。名一時に高し。性豪放にして、而母に事へて孝を致す。元祿中、故あり、八丈島に謫せらる。恒に、畫を母の許に贈り、衣食をして、乏しきこと無からしむ。居ること數年にして、江都に反るを得。其の赦に遇ふ時、會々、一蝶の草花上に止るをみる。是に由りて、姓を英名を一蝶と更む。其の畫益々行はる。俳歌人其角と親み善し。享保九年、七十一にして歿す。子信勝。一蜂と號す。亦畫を善くす。

此の文は、畫人英一蝶の傳であります。傳とは、其の人の事迹を記載して、後世に傳ふるの文であります。此に史傳と、家傳と、托傳と、假傳との四者の別あることは、前にも申上ました通りで

あります。今此の文は、其の第二者の、家傳體に屬するのであります。

偖、英一蝶と申す人の、本々の氏は、多賀と申しまして、英とは、後に自ら改め名けられたるの氏で、本氏ではありませぬ。(英一蝶、父を多賀伯菴と曰ふ。承應元年に生る。幼名は猪三郎。)又、本は、攝津の人でありましたが、後に攝津より移りて、江戸に住でをられました。(寛文六年に、石川侯の命によりて、攝津より、江戸に移り住はれました。江都は即江戸なり。唯、文人學士の輩が、其の名稱を典雅にせんが爲に、江戸江都、音相通ずるの故を以て、ワザト、江都と云ふ字を、用ゐたものであります。)最初に、畫法を、狩野安信と云ふ人に就て稽古されました。ソコデ、其の先生の姓を續で、狩野信香と稱へてをられましたが、其の後に、又本々の多賀氏に復姓して、サウシテ、名乘を長湖と更めかへられまして、多賀長湖と申して居られました。(一蝶の別傳に依りてみますと初め畫を狩野安信に學むで居れます頃には、安雄と稱し、又〻次左衞門。助之進。信香など丶稱し、字を君受と申して居られましたが、後に剃髮して、長湖と呼んで居れました。)サウシテ、雅號を翡翠翁と申されまして。又、別に、曉雲北窓翁と云ふ。號を付け居られましたが、(此の外にも、牛丸、一峯閑人、一閑山人、隣樵菴等の別號あり。河鈎鳥、一名は翡翠、水鳥の名なり。今は、其の鳥名をとりて、翡翠翁と號せしものなり。)其の繪畫の流義が、狩野派とか、雪舟流とか、土佐派とかに異りて、別に英一蝶風の、一家の畫風をなして、此迄の流義の外に、一蝶流の畫風を、別に開きました。ソコデ、其の一蝶の畫名が、其の當時に名高くして、中々に、有名でありましたが、今日でも、

矢張同じことであります。一蝶の性質は、豪放で、總ての事に頓着せずして、磊落不羈な質性の人でありまして、禮儀作法など丶云ふことに拘らぬ所の人でありました。ケレドモ、(茲所の而字は、サウデアッタケレドモと解すべし。阿母樣に事へて、孝道を致し盡されまして、中々親孝行な人でありまして、善く母に仕へられましたが、元祿年中に、故ワケありて、罪に觸れて、八丈ヵ島に謫し流されました。即ち、流罪の刑に處せられて、八丈ヵ島に、島流に遭はれましたが、自分が居らぬから、母が難義をされてはならぬと思うて、始終八丈ヵ島より畫を母の手許に贈られまして、ソレヲ賣りて、渡世をなされる樣に致されまして、衣物や、食物をして、缺乏して困難をなさることが無き樣に致されて居られました。一體、何事でも無頓着で、構はぬ風の人でありましたけれども、餘程、

親孝行な性質の人でありたとみえますが、八丈ヵ島に流されて、島に居れますことが、幾年もでありまして、數年の後に、始めて、罪を赦されて、江戸にもどりて來られますことが出來ました。(元祿年中に流されて、島に在ること十有二年、寶永六年に赦罪に遇うて、江戸に反られました。)其の罪を赦免に遇うて、江戸に反ることが出來ると云ふ沙汰を受られました時に、會々、其の折に、鳥渡、一疋の胡蝶が、草花の上に止りとまりて居るのを見られました。ソコデ、赦罪に遇うた其の時に、花の上に、とまりてゐた胡蝶をみたと云ふ縁因によりて、此迄の多賀長湖と云ふ姓名をかへられまして、姓を英(草花の花房にちなみて英。)名を一蝶と改めて、始めて、英一蝶と云ふ名字を名乘られました。(一疋の胡蝶にちなみて、一蝶。)が、此よりして、一蝶の繪畵が、益々段々に、倏に世間に

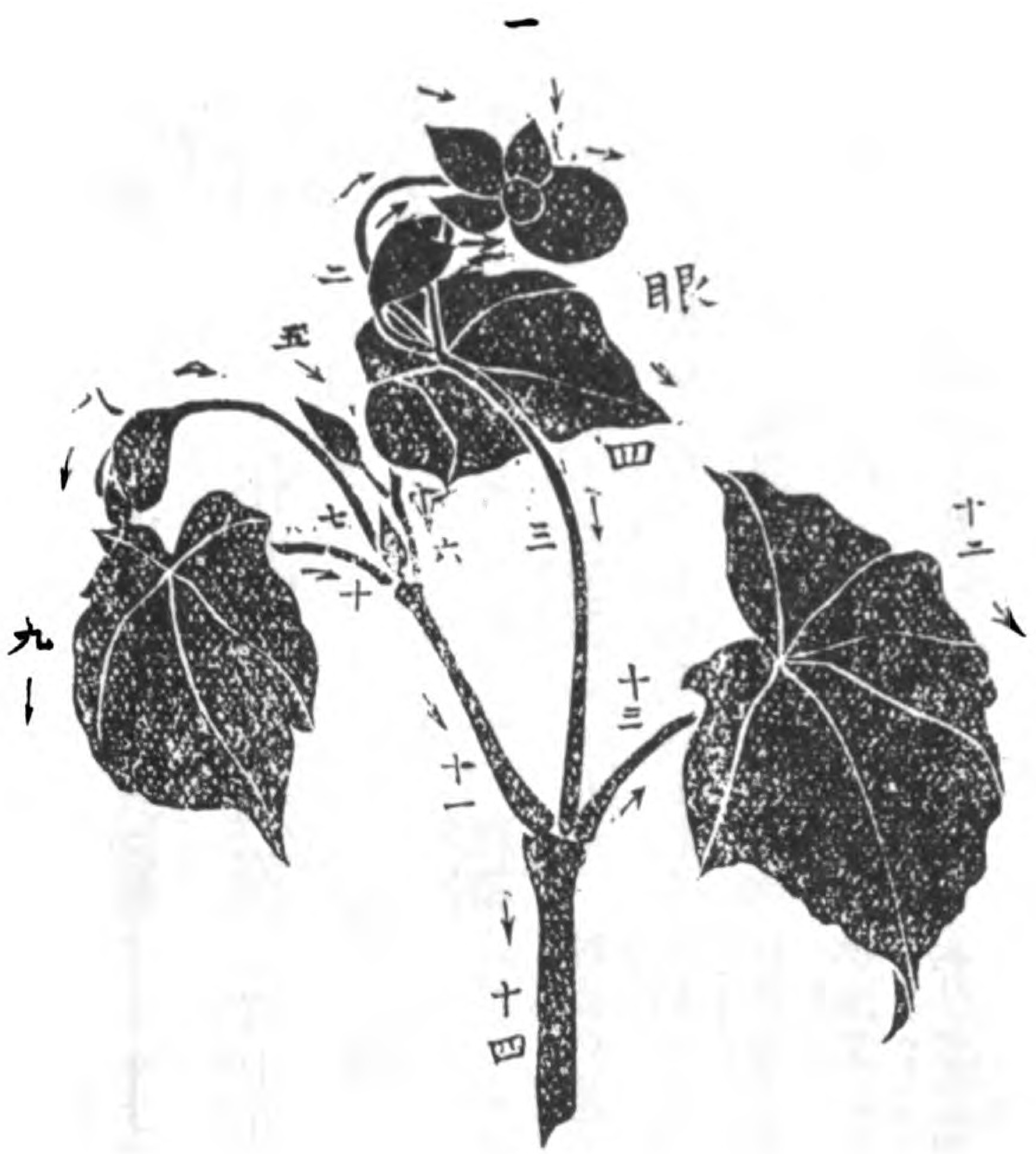
流行して、一蝶の畫が、當時大變にはやりましたが、今日迄も、中々一蝶の畫は、盛に行はれて、世間でも、其の畫風を賞讃するものが多う御座ります。俳歌人で、俳諧發句を能しました所の、榎本其角と云ふ人と親善で、朋友として、親み仲好く、交際をして居れました。(其角、姓は榎本、芭蕉翁の門人で、矢張豪放な性質の人でありましたから、一蝶と仲が好つたものとみえます。一蝶も、俳諧を芭蕉翁に學んだことがありまして、其角とは、同門であります。)が、享保九年に、(正月十三日)年齢七十一にして歿し死なれましたが、子の名は、信勝と申す人、雅號を一蜂と稱して、此の人も、亦々父一蝶の流派を續いで、繪畫を上手にして、父の名を辱しめられなかつた。一蝶の墓は、芝區二本榎、承教寺の塔頭、顯承院と云ふ寺に御座りまして、まぎらはすうき世のわざの色どりもありとや月の薄雲の空と曰ふ辭世の和歌がありますが、此ノ事は、唯叙ながらに、御話し申上てをきます。

和畫通信講義（第十五回）

山崎彩峨

日本畫は、近來まで、粗畫には、あまり、比例をたゞさゞる流派ありしが、洋畫の漸々普及するに從ひ、兒童も容易にこれを識別すれば、勢、いかなる粗畫といへども、比例に注意を要するに至れり。されど、牡丹、芍藥、秋海棠の如き、甚だ不比例なるものあり。故に、寫生意匠畫の別なく、臨畫の際、注意なさゞるべからず。

墨にて畫くには、淡墨を含めし筆先へ、濃き墨を附して、葉を畫き、それより、掠墨にて葉幹子房


一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
眼

を畫き、次に、淡墨にて、花並に花粉を畫き、乾きて後ち、濃き墨にて、葉脈を入るゝなり。彩色なれば、藍黄等分の靑色にて葉を畫き、次に、代赭を和したる黄がち靑色に、紅色の度をはかりて、實物にかなへる樣、胭脂を挾墨として、莖幹子房の部分を畫き、後ち、胡粉を含めし筆先へ、胭脂を附して、花の部分を畫き、花粉は、黄色にて畫き、乾きて後ち、代赭にて點を打ち入るゝか、黄色にてときたる胡粉かにて畫く。かくて、葉脈は藍か藍墨かにて入れ、其の莖の葉裏に附着する部分は、表に紅色を點ずるなり

夏山の瀧のひゞきをとめくれば
蟬の鳴くれも涼しかりけり　　定臣



梅雨　　東久世通禧

池の面の蓮のうき葉もなみこえて
にごりそまさるさみたれの頃

深山瀧　　鍋島直大

狹霧ふくみ山のたきのあたりには
おつも近くはよらぬなるらん

菱　　津輕承昭

いろくつの遊ふところもせはき迄
菱のうき葉のいけにしけれる

竹風　　竹屋光昭

ともすれば雨の音かときくものは
しけれる竹の葉かせなりけり

川梅雨　水野忠敬

ふりつゝくさみたれの雨はや増して
底さへにごる刀根のかはみつ

竹裏螢　長谷信成

夏の日もやゝくれ竹のしげみより
かけわらはれてとふほたる哉

船納涼　宮地嚴夫

こぎ出てみれは夏ともおもはれず
船のうちにはあきやいりけん

朝梅雨　坂正臣

ぬきかふるきぬもしめりて梅雨の
わした詫しきねやのうちかな

名所梅雨　大口鯛二

洞道はくつれもぞするさみたれに
ぬれてもこえむうつのなか山

船梅雨　遠山英一

さみたれの雨のたまりてすて小舟
沈むはかりにみゆるころかな

竹風　蜂須賀随子

文つくゑのちりもをりをり拂ふあり
まなびのまどの竹のしたかぜ

夏露　鍋島榮子

よもぎ生におきわたしたる朝露の
かはかぬほとり夏はすゞしき

深夜梅雨　前田朗子

更るよのゆめおどろかし騒かしく
またふりしきるさみたれの雨

田上螢　柳原愛子

風渡る小田のさなへのはすゑより
つゆもこぼれてとふほたる哉

湖上螢　小池道子

いさり火のひかりは消しみつ海に

ひとり殘りてとふはたるかな

聞水雞　小川直子

さやかなる月はかりかは門すゝみ
水雞のこゑもきく夜ありけり

谷竹　常盤井文子

岩はしるたきのしふきに谷かけの
たけの下葉はたえすぬれつゝ

草庵螢　中牟田常子

よの中をはあれてすめる草の庵を
夜とふものはほたるなりけり

岡梅雨　服部磯子

をかのへにかけ茂りゆくやま栗の
花ふりくたすさみたれのころ

姫百合　宮地小東洋子

優しくもをりそへてけり里の子が
くさかるかこの姫百合のはな

心の花

井上頼文

夏の末つかた、關山村の奥なる、原温泉に遊びけるをり　山岸光徹

峰よちて草かるわらはのはるらん
そらにきこゆる笹笛のこゑ

谷かけの杉のうつほにふくろふの
ひそめる姿めつらしきかな

たちのほる霧にかくれて山さとの
路は遠くもみえにけるかな

窓ちかくさすかけさむし關やまの
夏はいつことと月に問はや

わすれては冬かとそ思ふ消え殘る
谷のしらゆき峰のすみかま

見おろせは黑雲まよひ鳴るかみは

ふもとにのみそあり響くなる
あら熊のいまかすきけん音たてゝ
嵐あきたにの小笹さやくは
岩魚つり今たに川やあさるらん
松明の光りの見えかくれする
はとちかくやかて里にやありねらん
木つたひておく山からの聲

夏けしき

小西甚之助

夏草

駒の跡もわかすありけり夏の野邊
はみのこされし草のしげりて

百合草

鬼荒の八重にしけれる野中にも
ゑましげに立つひめゆりの花
嵐あくも夏野すゞしくおぼゆるは
さゆりの花の咲けばありけり

罌粟

朝日影入しほの錦ふすまにて
寐ざめ顔あるとこあつのはあ

夕顔

小簾かけ水そゝがせて見る軒に
いろもすゞしき夕顔のはあ
ゆふかほの花さく軒におく露は
賤がふせやにひかりそへけり
賤が家のかき根にかゝる夕顔や
世の貴人のこゝろひくらん

夏夕

さま〳〵に色どる雲の夕はえは
夏もにしきを猶かさねらむ

夏の夕空

くれなゐの海に緑りの島うかぶ
さま面しろきなつのゆふぐも

夏の雲

かうづけのめうぎの山の形して
みねたちならぶなつの夕雲

花としも綾またざれど峰に見て
こゝろうきたつ夏のしら雲

そばだてる雲の峰にもまた雲の
峰立ち添ひて奇しくもある哉

夏雲如雪

雪つもる峰とみるまてしら雲を
あふくもすゞしみなつきの頃

雪つもる越のしら山みんなみに
見るぞあやしき夏のしら雲

夏月

氷水もれるうつはに影さして
はしゐすゞしき夏の夜の月

うちそゝぐ水にふきたつ夕風は
庭にかけさす月やおくれる

影涼しひかり清しとみじか夜を
わすれてふかす夏の月かな

夏星

あまの原草木にしげきしら露と
見ゆるもすゞし夏の夜のほし

夏夜

まくら吹く風に夢路のすゞしきを
はかなくも明るみじか夜の空

夏山午睡

岩枕谷の下水おとづれて
ひるねすゞしき杉の陰かな



女訓綾廼雛形（承前）

揖取素彦

一、膳を上るとき、燒ものをば携へたきよし、通ひの者へ申べし。燒ものは、主人自身に進らるゝ事もあるほどの品なれば、珍重して物歸るが、主人への禮儀あり。

一、主人饗饌中に挨拶あるとき、箸をさめ、手をつきて一禮あるべし。此のとき、箸を納むるには膳のふちへ掛けておくべし。

一、飯後の菓子茶まゐる事、前に記せしものにおなじ。

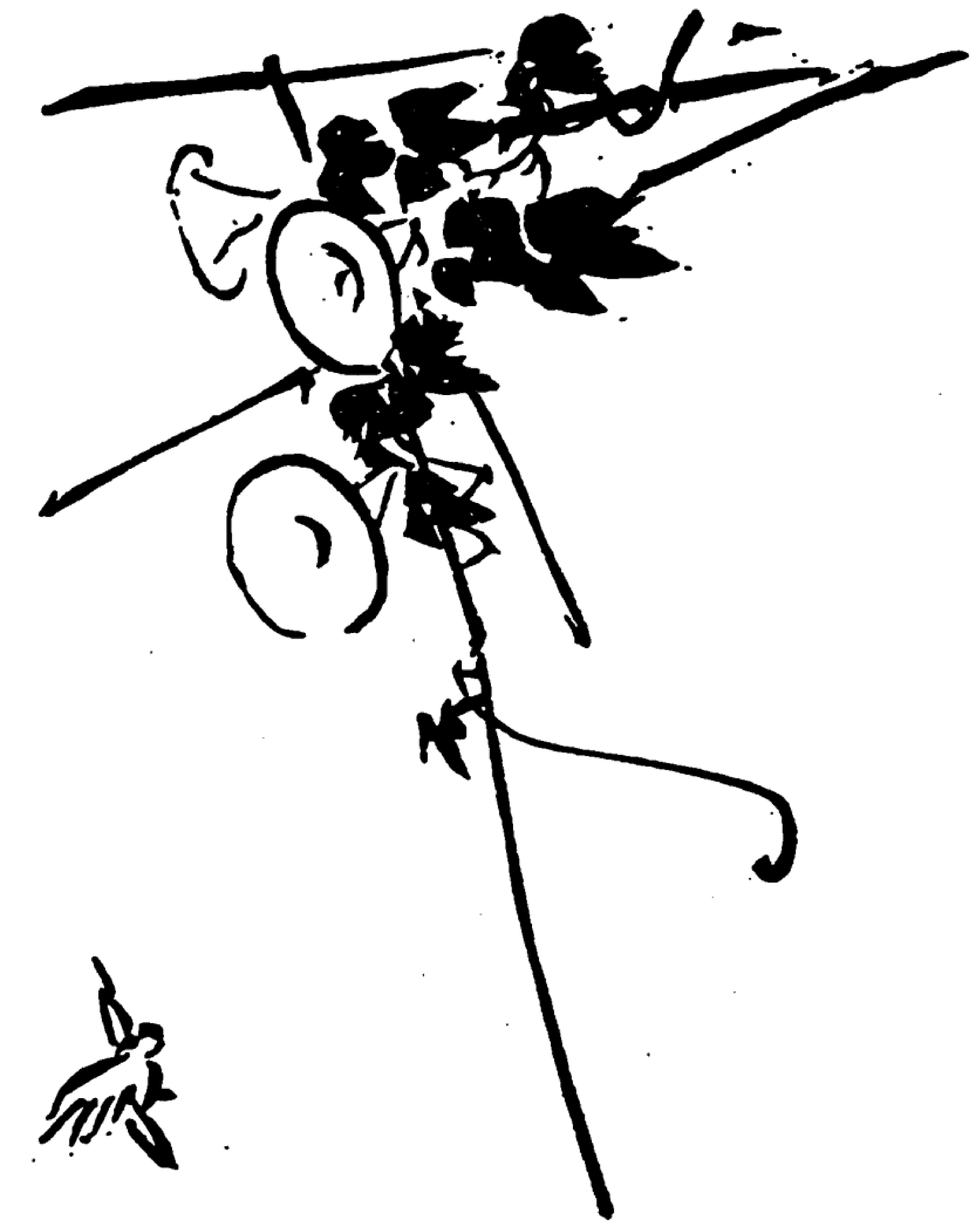
以上數十條、初段三節の大概あり。

附録

一、中酒を進むる事あらば、飯濟みて湯を參らする前に、吸物を八寸の木具に居ゑ、本膳と引落しの中足の間の通りの向ふに置き、盃を八寸の木具に据ゑ、本膳と燒ものゝ間の通りの向ふにおき、さて、酌參事る初獻の時の如し。客主人挨拶ありて、盃を取り上ぐ。酌一度盛り中座す。客吸物を參らる。つゞいて肴もの參る。中皿又は小角に差身を盛り、小猪口に煎り酒、又は土佐醬油を盛る。通ひ盆にすゑて參り、吸物の木具におく。酌又まゐり一度すゝむ。肴もの參る。鯛のふくら煎、鯛の薄身を大猪口に、盃にすゑて參り、吸物の木具に置き盛りて出すべし。酌また參りて勸む。客十分參りし由にて辭し申され、酌勝手へ入る。盃臺及び吸物八寸をあぐ。さて、湯まゐる事初にし

すごとし。客もし賓客の人にて、格別にもてなす時には、主人自ら臺引きの肴を進むる事あり。初度の者に續いて、木具に紙又は白木の折敷に檜の葉をしき、大蒲ぼこを盛り、箸をそへて參り、主人の前に置く。主人みづから木具を持ち、客の前に進み、はしにてはさみ進む。客平皿のふたか、或は分杯をとりて受け、謹でいたゞき申べし。主人復座す。通ひの者、木具持ち勝手へ入るべし。中酒のもてなし、大抵此の定あり。進退の業は、前にしるす趣きを以て心得べし。

朝貝や秋は朝からあはれなり



一、立居振舞の業および物給る樣一通りを記す。

もとより、進退周旋その業を以て指南せざれば、委曲を盡しがたく、且、現今よりして謂へば、迂濶の古法なるものあり。されど、古法により進退の節を示しがたきによつて、姑らく、小笠原流の舊傳により、伊勢家の眞傳に折衷して、女子躾初段を述ぶ。もし、是を模範として、常に進退を調習せば、時習の洋風の席に臨むも、その節目を大略問ひ訊して、事に從ふことを得べしと云爾。

（完 結）

各國婦人の特色

三石直方

▲他の長は、賞て我が短を補ふべし、他の短は、以て反省の料とすべし

▲たゞ我が長をすてゝ、他の長短をあはせるの愚をなすべからず

第四章　獨逸婦人

（其の四）獨逸婦人の地位

此一節は曾て世界の日本誌四評論欄に日耳曼の婦人として掲載されしものなるが現今獨逸婦人のなふ地位には最も便利あるを以て此に引用す

政治的結社には、婦人、學生、丁稚を加入するを許さず。又、政治的集會には、此等婦人、學生丁稚の在席を禁ず。」とは、普魯西亞聯邦法律の規定する所なり。英米にては、婦人も、政事に關與するの資格を有し、有力なる團體を組織する程なるに反し、獨り、日耳曼の婦人にして、猶此の規程の下に屈從するは、抑も何の故ぞ。其の理由は、政治上に因するのみならず、又、多少社交上に基づくものなり。獨の婦人の理想は、好箇の家政者になり。獨は、富裕なる國にあらざるが故に、婦人は、專ら家事を整理するを務む。彼等の見聞は狹く、彼等の知識は、面倒なる瑣細の事に止まり、其の時間は、大抵閾の中に消さる。

此の舊習を憤慨して、婦人の位置を進めんとするもの、近日漸く起れり。然れ共、其の運動は、未だ甚だ微弱にして、幾たびか失敗の履歴を作れり。蓋し、獨の婦人は、英米の婦人の如く、公事に奔走すこの權なきが故に、折角奮起せるもの、容易に社會に承認せらるゝことなく、成功を奏すること頗る困難なりとか。大學校は女學生には閉ざされ、保育所は貴女の關係するを例外とす。此に於

て乎、中年にして結婚の期を失せる婦人は、女傳教師となり、社會事業に力を致さんとするものありと雖も、多くは、主任教師の管理に繋がれ、自由に布教する能はず。

一方にては、結婚の期を失せる中年の婦人は、傳教師となるを好まざれば、家内に留り、主として經濟の整理に當る。而して、此の結婚の機を失へる中年の婦人の數は、實に全國の中年婦人の四分の一を占むと云ふ。獨の諺に「各人をして適當の職業を有せしめよ」と曰へるは、獨り、男子のみに限るものにあらずして、婦人をも含めるものなり。即ち、彼等婦人の目的とせるものは、獨修より獨活にあり。

且つ、獨の婦人は、大學に入るを許されざるが如く、彼等は、辯護士又は醫師たる能はず。近年漸く其の請願を容れて、一二之を實施するの許可を與へたるの地ありと雖も、學位は、總べて他國より受くるの外之を得るの道なし。獨の全國の女醫師は、今や、僅に十人あるのみ。處々の大學の講演には、婦人は特別なる客として臨聽するを得るに過ぎず。例へば、伯林に於て、大學の校長ワグネル博士の盡力に由り、今年漸く平等に婦人を講演の席に列するを得せしめし程なり。然れども、たとへ校長の許可を得たるものも、時としては講演者の承諾を得る能はざるが爲に、出席する能はざることあり。其の講演者の如きは、家僕を使はし、講演に出席せしむべき貴婦に限り、一々報知すべしと云はしむるものもありと。現に、新聞の報ずる所に由れば、有名なる歷史家ツライトシツケ氏の如きは、講演の最中一婦人の臨聽せるを見出し、直に、講壇より飛び來り、其の婦人を引摺り出せりと云ふ。

一般に、日耳曼婦人は、高等の教育を受けたるものにあらず、文學は格段に教へらるゝも、他は殆んと無頓着なり。宗教は彼等の知識思想の大部分を作るものあれ共、從順に遵守するのみにして、疑問を發することを許されず。此の兩三年前より、婦人の爲に、特に、伯林、ライプジック、カルスルーヘ、の三箇所に高等學校を設けたるが、今年に至つて、卒業すべきもの數人あり。婦人に高等教育を施すべしと主張する人とは、果して、此等卒業者が、男子の如く大學に入るの特權を受け得るの資格ありや否やを配慮しつゝあり。

獨逸婦人の位置は、實に、未だ斯る狀態にあるを以て、彼等婦人は、獨逸の憲法を以て、婦人の請願に反するものとし、法律の防正を促さんとす。獨逸の法律は、其の妻たると母たるとを問はず、總て、婦人の個人的權利を承認せず。妻は、家内に在つては兒女を管理すと雖も、一旦夫の死するに至れば、法律は、第三の後見者を定めしむ。夫は、妻を後見たらしめむと希望するも、法律は、婦人を後見者となすを許さず。

斯の如きは、英に在つては、既に數十年前の狀態にして、英にては、最初勞働婦人より起つて、婦人の權利を請願せるに反し、獨は、中等社會の婦人、殊に之が請求を務む。今や、社會主義合衆黨は、婦人の味方となり、中等社會の婦人は、勞働婦人と提携しつゝあり。此に於て乎、男子の勞働者は、其の賃金を增加するには、女勞働者を排斥すべしとなし、之が驅逐を計りしが、却て、女勞働者は、其の數を增加し、五百五十萬の多數を見るに至れり。則ち、未だ全く、婦人の權利を進むる能はすと雖も、徐々として、其の勢力を得つゝあり。ウヰルヘルム、リブクネヒトの如き、有力

ある主働者を戴くに至れるも、其の兆候として見るべからずや。

一千八百九十年社會主義合衆黨のヘーレーに年會を開くや、男女兩性を以て、國事社會に同一の權利を有するものと承認するの條を議定し、翌年萬國社會黨のブラッセルに開ける集會にては、同じ議定をなし、一千八百九十二年には、婦人も又其の會議に委員を派遣することを承諾せられたり。又、勞働婦人は、十一時間勞働を十時間に減せんと運動しつゝあり。此の問題は、多少、中等社會の婦人の意見と衝突すと雖も、

見定めた所もなしや萩の花



又、彼等勞働婦人の勢力を表するもの、彼等は、其の成功を見るに至る迄は、決して、此の請求を放擲せざるべし。

以上、掲ぐる所に依つて之を見るも、獨逸婦人が、社會上に有せる位置は、遠く英米佛等の下にあり。而も、近時四圍の列國に於て女權の伸張さるゝに促され、且は、婦人の奮起と、獨逸一般の女子に對する思想が進歩すると共に、面目一新の望ありと謂ふべし。

女子要書解題（牟之部）

三浦千畝

無名訓　二巻

著者詳ならず。延寶三年の自序あり。經史に據りて、智識道德の必要を述べ、女子を訓誡したるものなり。引用例示する所頗る博く、文章亦拙なからず。着實ある老學者の手に成りしものと覺ゆ。上欄には、標注を掲げたり。さて自序には

唐土には、女孝經、女誡、女範、烈女傳なと云て、女のまなぶ書あり云々。我朝の女は、おろかならぬと云人だにも、文字をしる事すくなく、禮儀を聞事をたしなまざるにより、かかるたふとき教はしらで、たゞ不義無禮なる物語双紙をこのみ云々。今此書は、古の訓を述て、人を達し、人のよからむことを願なれども、學び拙く、こと葉いやしう、なづけたるにたらぬものなれば、無名傳の名をかり用ひて、無名訓とぞ云ける。上卷は女子の爲にかけり。下卷はみづからの工夫をしるし云々

とありて、女子は、各其の分を守り、古の跡を倣ひて、理を知り、心を正し、身を治め、人に仕へ、我か偏を直すべき事を懇に教へたり。

於之部

老がこゝろ　一巻

上杉鷹山公の著なり。公は米澤城主上杉吉憲の子にして、名は治憲、天明五年老を請ひて鷹山と號せり。平生學を好み、紀平洲、瀧長愷、澁井老儒等を迎へて、道を聞き、治國の要を問ふ。勤儉自ら持し、農圃を奬勵し、孝悌を振起し、又興讓館を建て藩士を教導せしむ。文政五年卒

す。年七十二。
此の書は文化六年孫女の婚して江戸に發途の時、そのはなむけにとて書きたるものにして、卷末に『むさしの江戸なる館へおもむき給ふはなむけに』とて『春をえて花すり衣かさぬとも我古里の寒さ忘るな』の歌一首をのせたり。始に孝の道より舅姑に事ふる心得に及び、次に男女の別は人倫の大節なるより、夫に順ふ道、家を齊ふ。教に至り、次に子の賢否は母の賢否によることを說き、慈愛の道を示し、終に身を節儉にして家臣を愛し、四民を撫育して民の父母たるべきことなど、君夫人としての心得を懇示せり。



詠史百首（加藤千浪作）評論

海上胤平

齋藤別當實盛

染かへしかしらの雪のそれならで
　水にも名をばそゝぎつるかな

初句、染かへしといへる詞は、ゆかず。實盛は、白髪を黒く染めたるなり。頭の雪といひては、黒髪を白く染たるにありて、事實たがへり。四五句、水にも名をば云々、をさなきいひざまならずや。

西行法師

言の葉の道もいたらぬくまぞなき
　杖と笠とに身をまかせつゝ

四五句、今少し丈高くあるべし。此の歌、後の俳諧者流などのさまにて、此の法師には相應か

らず。

那須與市宗隆

弓矢には世にたけたりし家の風
　扇よりこそ吹はじめけれ

初句、にはとあるは、きこえくるしき詞ならず。世にたけたりしも、むつかしきいひざまなり。たけといふ詞は、世にも家にも、よしなし。されば、こゝには叶はず。さて、與市が弓矢、此の扇のことより、きこえ初めたるやにて、いとまぎらはし。宗隆は宗高なり。一首のうへ、扇、對たるさまなくて、きこえがたし。

常磐御前

鎌倉や鶴が岡へに千代よぶも
　まつか常磐の陰にさりける

常磐の松とこそいへ、松か常磐とは、いかでかいふべき。前に見えたる、花つまの秋とよめる

にひとくして、いひかひなし。

都女

思ひかね立まふ袖の雪にさへ
　したふこゝろのあとは見えけり

おもひかねといふ詞は、思ひにたへかねてといふことなり。そは、古歌に見えたる、おもひかね妹がりゆけばなどの如し。さて、鶴が岡の舞は、止事を得ざるにて、われとおもひかねて、舞るにはあらず。作者、此のことがらも心得ずして詠るにや。また、例のあと、例のさへ、並び出たり。

作文雜話（五）

安藤晴晨

文題に對しての注意

すべて、人は、何の方面に於ても、それ〴〵癖をもつて居るものであるが、文章を書くといふ事でも、人によりて、いろ〳〵異つた風がある。

然し、先、初學者はどうするであらうかといふに誰でも、一の文題をとりて之を書かうとするには、第一に、その作例をいろいろさがしてみる。さうして、面白さうな句などを書き拔き、それから、いろ〳〵それを綴りあはせて一の文章とする。これは、普通のやり方であらう。

かういふ、自分も　實は、その經驗があるのだ。

右のやうなやり方も、初學者に對しては、そうせめるわけにはゆかぬ。章句などをおぼえるには、大に助けになる事もある。然し、これは、暫時の間はゆるす事ができるが、いつまでも、こんな風にやつていつては、その作者の文章思想の發達を妨げるおそれがある。

草花にうれふる秋となりにけり



それは何故かといふに、蓋、右の方法は、既に本末をあやまつて居るからである。抑、文章に於て第一に重んずべきは、思想で、文藻字句は、第二である。それであるのに、先、文句を先に探しておいて、それをよい、安排にくつゝけてゆくのでは、自然、その文章に於て、思想が文句の束縛をうけ

るやうになる。否、それのみならず、思想が、文句より生じてくるやうな具合である。それで、こればかりをやつて居ては、いつまでも、文想の發達するといふ事は望まれない。

自分が、初學者に望むのは、初の間は、文句は流麗でなくてもよいから、思想のよくとほつた文をかいてもらいたいのである。いくら名句を綴りあはせてあつても、その思想が實際にその人の胸中より出たのでなければ、一向面白くない。いくら御世辭が上手で、愛想がよくつても、そのもてなしが眞情より出たのでなければ、そんな人の厚遇は、却て有難迷惑であるが、いくらまづいものづくめでも、田舍人の質朴な眞情よりいでたものは誰でも、それを嬉しく味ふは、人情ではあるまいか。文章もそれと同じである。

尤、初學の間は、文題に對して、うまき趣向のでぬものであるが、それは、誰れでも經驗する事である。然し、その、趣向に苦しむといふ事が、つまり思想を練るといふ事になる。思想を練る事が出來たらば、それから後は、いかなる文題に對しても、思想は滾々として泉の如く湧きいづるであらう。しばらくの間の苦だから、辛抱してもらいたい。

即、ありのまゝ、自分から出た思想で、文を書いてもらいたい。それから後始めてその思想にあてはまつた文句をさがすなどは、それは自由である。

又、自分は、作例を見るなとは決していはぬ。然し、それに拘束せられてはいけぬとは、くれ〴〵もいふ所である。

それからまた、文章を書くに、よく文題の主意のある所をわすれないやうに、注意すべきである。とかく、初心の中は、肝心の所を疎にかゝずに、餘計の處をごた〳〵と書くものだが、これは宜敷

ない。花見の記に、途中の事ばかり多くつて、花に關する事は、只二三行のみであつたりするは、その文題の主意のある所を、忘れたからである。これは、よく注意すべきことである。

文章の上手な人の中には、別に頭をくるしめる事もなく、直に、筆を執りて數千言立どころに成るといふやうなのもある。而し、それらの人も、始から、さう上手であつたのでないのは明な事である。かゝる、愉快な地位に達するは、幾多か慘憺たる苦心經營を經てからでなければない。兎に角文章を學ぶ間は、苦しむつもりでなければ、とても充分の文想を練り養ふといふ事はできぬ。

大和めぐり（承前）

井上賴文

これは、館氏の日記前號の續きなり。又、本誌第二百三十四號の本題に森氏日記の續きなりと云ふを落したり諸媛諒せよ。

猶ゆく程に、小さき橋あり、馬出橋といふ。若宮祭の夜、流鏑馬の式あり。その折、この橋より、射手の兒が、馬を乘り出すにより、かくなむ名けたるとぞ。千早振甲斐の黒駒ひきよせて乘手いさむる春日野の原と射手の兒等を詠める歌も、物に見えたり。橋の左に、若宮行宮の跡あり。御祭のをり、假殿を、こゝに營みて、若宮を渡御しまゐらする處ありとぞ。常は、宮居もなく、たゞおけるものは、芝生の露のみ。帝國奈良博物館は、春日野のほとりにあり。馬出の橋をうち渡り、雪消の澤を右手に見て、鹿の林をかきわけて、ゆくての道の右左にならびて立てる石燈籠、心もそらに、目もあやなり。うち眺めつゝ行く程に、いつしか來けむ。車舍（こは貴人の參詣せむ折、下乘して車を宿しおくべき所ありとぞ）二の鳥居を打過ぎて

盥水のほとりに來にけり。こゝにて、まづ手を洗ひつ。その左に瀬織津姫をいはひまつれる、祓戸の社あり。皆ぬかづき奉りて、身のまがを祓ふ。大鳥居より、二の鳥居までは、七八町もあらむか、たゞ見ゆるものは、立ちならぶ石燈籠と、うち群れ遊ぶ大鹿、小鹿とのみ。あたりを覆ふ老松、古杉、神さびて社域をかこみ、春日の奥が比窺ふべくもあらず。城内、八十五町計りといふも、僞言にはあらざるべし。着到殿は、祓戸の社の右手にあり。大宮祭の時、勅使の着到し玉ふ所ありとぞ。殿は、うるはしき方あるべし。猶一町ばかり行けば、朱塗の社あり。これなむ若宮の鎮ります御社ある。こを左に見わげ、やゝ進みて拜みまつりしは、三十八ヶ所の社あり。こは春日山に鎮ります、攝社、末社の神々を合せまつりし社なりとぞ。さて元の道に歸りてぬかづき奉りしは、若宮の御社なり。天押雲命をいはひまつる。御社の前に、神樂殿あり。殿には、歌仙の額面をかゝぐ。畫は後光明天皇の宸筆にして、いともかしこきものぞかし。神樂を奏して、學の道の功を立てしめ玉へと祈りまつる。舞は、御巫舞とて、玲瓏なる琴の響につれて、鈴ふり舞ふをとめ、聲高らかに歌うたふ、神づかさ、皆けうらあり。目は舞姫の方に、耳は琴の音の方にあびきぬ。

若宮のみかげうつろふます鏡くもりあらせずかへりみたまへ、とは神つかさのうたひしうたあり。御酒いたゞき終へて、大宮に詣でぬ。うるはしく細やかに色どれる樓門は、人皆の目を驚したり。こは、大宮の南門あり。嚴にとりかこめる朱の廻廊にも、亦一驚を喫したり。南門の西の方に、慶賀僧正、内侍の諸門あり構造美麗南門に同じ。昔は諸門、皆鳥居にて、廻廊は瑞垣ありしが、今

を去ること、七百年ばかり前より、かくは改め營みたりとか。南門を入れば、やゝ距りたる所に、又うるはしき樓門あり。中の門といふ。御本宮は、こゝよりぞ拜みまつるなる。社頭を見上ぐれば、二階の樓門、三の廻廊いかめしく、四柱の社は、神さびておはす。宮もとどろに響く八平手の音に神の御稜威をぞ仰ぎまつる。齋き祀れる神は、武甕槌神、經津主神、天兒屋命、姫神、四柱におはします。この四柱の神たちは、三笠の山の下つ

秋そめし露に咲きけり花桔梗



盤根に、宮柱太しりたて、高天原に、千木高しりて、神護景雲の昔よりぞ、鎮りませる。爰に、かく鎮めまつりしは、誰ぞと尋ぬるに、こも藤原氏にして、四柱の神たちは其の氏神にぞおはする。春日の社と、藤氏との關係を論はゞ、いともをかしくあやしきふし多かりぬべし。されど、こゝには、絮きつ物せむ折は、又もあらむかし。幣殿、直會殿、移殿などは、中の門の左にあり。結構壯麗禿筆に寫さるべくもあらず。其の外、いさゝけ

き社、数しれず、神さび立てり。こゝかしこ眺むる程に、井上教授の、來よ〳〵と招き玉ふ故、何事と尋ね參らすれば、寶物の拜觀を許されしなりと答へ玉ふ。これ井上教授は、當社の禰宜、大東延慶氏と知人にておはするが故なり。寶物の陳列せられたる所は、中の門の、左なる、廻廊内にあり。其の重なる物は、將軍綱吉公の奉納せられし、神功皇后、三韓御征伐の御弓矢の模作。弓は、桑樹にて作れり。義家朝臣の納められたる、甲冑、義經の、甲冑、南朝名臣の佩きける太刀、楠公の奉られたる甲冑、其の他、舞樂の諸具などあり、大東氏は、懇に、我等に示されぬ。拜觀し終へて、その厚意を謝し、内侍門を出でゝ、社務所、皇典講究分所等を、右に見て、水谷の社に詣でぬ。鎭ります神は、素盞男尊、奇稲田姫、大已貴命。境内も、いつしか過ぎけむ、やゝ進めば、行

くての右に、山あり。若草山といふ。見あぐる限り、八千草生ひ繁りて、いとよき山なり。世に、之を三笠山といふ。そは三山並び列りて、恰三箇の笠をうちふせたらむが如き姿なればなり。眞の三笠山は、春日の神の鎭ります山をぞいふなる。山の様を見むとて、宮島教授、及び、高松、大塚、澤田の三氏は登山せられたり。吾は足の痛みたへがたければ、得登らず。こは吾一人のみにもあらざりき、旅の空にて口惜しくもうれたくもあるものは、足の健ならぬ事にこそ。山の麓に、三條小鍛冶の流なりとて、刀劍をひさぐ家あり。案内者の誘ふまゝに、一同も入りて刀劍を見る。剃刀、小刀など買ふ人もありき。手向山に詣でむには、いとよき中やどりなり。この家を立ちいでゝ、手向山八幡宮に詣でぬ。山に登りし人たちは、まだ降り來らぬにや。はた先に行き過ぎしにや。影だ

に見えず。旅の空とて、吾等も幣はとりあへざれば、紅葉のにしき神のまに〳〵とて、たゞおごそかに拜みまつりつ。管原の大臣の昔もおもひ出でられておかし。御社には、仲哀天皇、應神天皇、神功皇后、仁徳天皇、ぞ鎭ませる。仲哀天皇、神功皇后は、一の御社に鎭りませり。凡て、三社並びてぞおはします。御社の後は、手向山なり。今日の一行人々の、峯の紅葉にきそひあひて織り出したる言の葉の錦も多かりけむ。また、その心々に見聞して、おもひうかべる懷古の談話もさはなりけむ。おのれは足をいためて、常に人々にも立ちおくれがちなるに、けふの日記の當番にあたれるからに、材料をと、そのかたざまにのみ心とられたるげにや。皆さゝ漏したるは、いと〳〵口惜しうなむ。

同じさまの事のみ書き連ねむは、わが本意にもあらず、文法にもそむきぬべけれど、いかゞはせむ。

今少し、こゝに書きたすべし。偖、かの手向山より北の方は、東大寺の境内なり。境内は、八町四面なりといふ。この寺は、聖武天皇の御本願にて、良辨僧正の開山せし寺なり。昔は興福寺と並べ稱せられきとぞ。職原抄には、この寺の造寺使といふ役も見えたれば、古は、極めて盛大なる寺なりけむかし。こもまた、七大寺の一なり。宗旨は、八宗兼學なれど、華嚴を旨とせり。建物、いと多し。そが中にも、二月堂、三月堂、大佛殿等は、人皆の口に膾炙せられたり。二月堂の、十一面觀音は、大佛に次ぎて、世に、其の名高く、信仰者、常に絶ゆる事なし。これかれの堂宇を巡り見て、鐘樓の下に至りて、しばし休ひぬ。樓内には、雜菓など商ふ店もありき。樓につるせる鐘、いと大なり。高さ一丈三尺餘、徑厚、之にかなへり。本邦

第二の大鐘にて、千二百年前の古物あり。一撞、一錢なりといへば、大枚一錢は惜しけれども、この鐘の音もきかまほしくて、遂に一同は引綱に手をかけたり。さすがは、大鐘。五人、十人力を合せて、天も落ちよ。地も裂けよと計り、一、二、三、と諸聲出して手綱をはなては、ゴーンと音して、百雷の一時に落ちかゝりたらむが如くひゞき渡りぬ。吾等の聲は、鐘聲と相和して、しばしはなりもやまざりき。この面白さにはだされて、二つき、三つき、はては六度までも、打ちつきたり。鐘聲や、きこえけむ。かの山に登りし人たちは、大佛殿の方よりはしり來ぬ。この人々の、にくらしきまで足の早く健なるには驚かぬものもなかりき。是にて、皆うち揃ひければ、大佛殿の方へと進みよりたり。大佛は、大物よ。寶丹などの用意と、舌滑にすべらせ出したるは福舎君なり。（評、その狀、見るがごとし）百も承知と、萬金丹さし出して、福舎君に示したるは、我ながらおかしかりき。長き廻廊をふみ越えて、大佛殿の前にいでぬ。吾さきにと入るを爭ふ。その折しも青々と頭光せたる僧侶二人入口を守りて、いざ拜觀料など吾等を引きとめたり。吾等は修學旅行のものなればといへど、保存の爲なればといへば、いふがまゝに、見料出して入りぬ。御一統樣に申上げますと否がるに、又もや口すべるは、例の案内者なりけり。されど、彼が口上は、耳にも入れず。見上げたり〳〵。うなじのたゆみを覺ゆるまで、大佛の形を見上げたり。萬金丹の必用は無かりしかどもさすがは、大物。吾等は、眼下に見下されたり。座像の總長五丈三尺餘ありとぞ。耳、目、鼻、口より指の長さに至るまで、こまやかにかき記したれど、何やらむの寸のみなけれは、かの川柳點に見

あらはされけむとおかしう覺えぬ。其より、大佛の周圍を巡り、且は堂の構造を見る。つきたてる柱は、兩手にてはかこみ兼ねたり。太さは、およそ二抱もあらむか。堂の高さは、廿四五間、廣さは、東西二十八間、南北二十六間計りなりと聞けり。金銅の盧舍那佛を安置せるかゝる大堂も、火の神のすさびには、如何ともしがたきにか。三度まで燒けうせたりとなむ。今建てるは、德川將軍、綱吉公の物せられしなりとぞ。されど、盧舍那佛のみは、千二百年前の遺物なり。いくそばく、その金銀をなげうち幾年月を費しゝか。(評調査疎なり。彼の緣記を見ざりしにや。さるにても、伊吹屋翁の、巫學談弊をわすれしか)五丈にあまる、この佛を鑄造りしこそ、いともかしこき業なりけれ。この座像を眺めて、誰か、其のかみ美術工藝の發達せるに驚かざるものあるべき。本邦の美術工藝、世界に、冠たるも、今日に始りたるにはあらずかし。此の大佛こそ、聖武天皇の御願にして、行基法師に勅し玉ひて、建てさせ玉ひしものなれ。思ひ出せり。聖武天皇。一天萬乘の御身を持たせられ、盧舍那佛の前に跪きて、三寶の奴とのたまひきと聞けるは、この大佛供養の時の事なりけり古學びする吾等が耳には、らくも、いまはしく、口惜しき事なりかし。おのれ、盧舍那佛。其のかみの美術の發達を、今の世に示すとはいへ。原を尋ぬれば、天竺の蕃神、寄留の身をもちて、畏くも天皇に、奴とよばせ奉り、內外尊卑をもわきまへざる、につくき五丈の盧舍那佛。奈良朝の恥辱は、奈良朝の恥辱のみにあらず。おのれありて、後世の恥辱。にくさも、にくし。この、盧舍那佛覺悟致せと、鐵拳はにぎりたるものゝ、五丈に餘る大佛は、われを眼下に見おろしたり。(評大佛は、

大物あり。大物由來感覺鈍し。鐵拳を加ふとも、唯頑々たらむのみ）いかにとも詮方なし。本地垂跡の説をとなへ、愚民は、おろか。天皇の御身まで、線香の煙にまよはせ奉りしおのれ行基と、心には怒れども、千有餘年前の人の面かげは、いかで、今の世にのこるべき。思へば、血の涙もいでむばかりあり。偖晝飯の時刻にも近よりぬれば、こゝいでゝ、正倉院へと志す。大佛殿より正倉院までは、二町ばかりあり。こゝは、聖武天皇の愛で玉ひし、御手道具どもを納めたる御藏あり。世に、其の名高き蘭奢待も、此の院の裡に納まれりとぞ。勅封あれば、妄に入りて見る事を得ず。警衛の巡査に一禮し、門内に首さし入れて、院の立てるさまのみをのぞみ見つ。院を圍める四方の高塀も、嚴に見受けられぬ。千有餘年以前の美術品の納まれる、所なれば、かくとり扱はれむも理なりかし。時に時針は、十二時を報じたり。案内者には、こゝにて暇をやりたり。三橋教授は、不快にて釜屋に歸り玉ひぬ。いと、口をし。井上教授と、阿知和ぬしとは、石の上、ふるの社にまうでむとて、之も、こゝよりわかれ玉ひぬ。あとに殘れる、十六名は、さく花のにふはが如く燦なりし、奈良の都の跡を尋ねむと志す。朝めしは、食前方丈、備後盤に座をかまへしわれ等も、晝飯には、正倉院高塀の下なる、芝生に、足なげ出して、わりご開きたり。香の物、二切、梅干、二粒外には、にぎりめし三つ。水なし。茶なし。唾にまるめて、かみ下す。咽のくるしさは何に譬へむ。（評わりごの苦しさは、今に始めぬことなるを、今日にかぎりて）苦しき際にて、背撫で玉へといふ人もありき。さても。うつろひ變り易きは、人間の榮枯。（評、人間の榮枯を感じたるは、是亦大佛の功德あるか）まのあたりのわ

れらが身にも、まづ思ひしられたり。

因に、いふ。石上の一行は、山邊郡、石上神宮に詣で、神寶を拝観し、車いそがせて、旅亭にかへられたりとぞ。道のついでに、元興寺の塔、帯解寺の帯解地藏、在原寺の業平遺跡、柿本寺の人丸塚、遍昭が遺蹟、良因寺の素性が石塔をど訪はむ豫想なりしかど、きはめて急ぎしかば、みな見もらしたりとて、いと殘り惜しげに語られき。この殘りをしく思はれしを、得ゆかざりし、我々の心地よしと思ふも、人惡の業ぞや。

衝口漫言（四）

白松園主人

○海内の文章平民に落つ

江戸時代に至り、貴族專有の文學は、一變して平民の手に落ちしより、山崎派なる燕趙悲歌の徒は、文章典禮盡く平民の手に落ちしとて、慷慨の辭とする者ありき。文章卑俚に陥りしといふにもあらねば、平民百姓の典禮に嫺ひ道徳を談ずるは、めでたく有難き一大進歩とこそいふべけれ。愛ふべきは文章下移に非ずして、江戸時代に於て人心腐敗の俑を作りし。

○人情風俗平民に落つ

と云ふにあり。鎌倉室町以前は勿論、江戸時代の初期に於ても、百姓町人の如きは、すべて男女共に貴族或は武士の風俗に倣ひて、人情嗜好も皆之を崇拝し、之に則る事を務めたりしに、四代家綱の頃に至りて、戰國の余風ある、勇壯殺伐の氣風を矯めんとして、却りて貞享元祿の遊惰驕奢の俗を醸成するに至りぬ。京都にもあれ、江戸にもあれ、由來貴族の風俗は、文學に於て秘傳口訣を崇

びしが如く、兎角歴史を崇重して、突飛豹變を許さず、漸次その必要に迫られて、變遷する位にてその範圍や狹少に、その系統や歷史的に、その嗜好や拘束的なりしかば、衣服調度の類を始め、自由進步の途を得る事能はざりき。然るに貞享元祿以前、武士は勿論、町人百姓までも、質朴武勇を貴びて、町奴俠客者流を出し丶頃は、遊婉懦弱なる風を厭ひたりしが、四代家綱の時に、殺伐なる蠻風をおさへんことに留意したりしにより、忽地豹變して度す可らざる患を貽すに至りぬ。元祿の頃、恰も米價の騰貴におひ、米を以て衣食する武士等が、家計の豐なるに任せ、一方の禁令を機とし、一瀉千里の勢を以て、驕奢墮落の風に移りゆき、町人が奢侈と相競ひて名譽とする如くなりぬ。町人のうちには、千金を抛ちて物のかずともせざる暴富の者多く、柔弱艶妖の態を喜び、常に遊里に出入し、金錢を湯水と浪費して、榮とせしかば劣らじと競ふ武士は、古へを忘れ、却つて町家の

七草もいまだ一葉二葉かな



風を撲し、おなじく娼樓劇場に奢靡を爭ふ。是に於て、人心嗜好の趨勢は、一世を擧げて俳優娼妓の態に移りぬ。此の如き重望を負ひたる優娼の徒は、改良進步に自由を得たる、頭髪衣服の研究に於て、晝夜熱心の結果、嗜好に投じて突飛なる創意を爲す者、續々出て來りぬ。武門武士の輩は、秩序といふに掣せられて、自由に改むるに憚あれば、從前の者と甚しき相違は、あらざりしに、系統なく、歴史なく、拘束なき娼婦俳優連は、專ら客の意を迎へんがために、日夜汲々として時好に適するやうに案出すれば、非常なる變化發達を來し、武士の家の男女まで、之に倣ふに至りぬ。之れ實に人情風俗平民に落ちし所以にて、平民に落つといふのならば、まだしもなれど、爾來此の習俗は痼疾となりて、遂に延いて明治の今日にまで影響し、婦女子は悉く、

○俳優藝娼妓の態

を仰ぎて、あらゆる婦人が装飾品の模範となし、之れは菊五郎の白粉なり、彼は福助の笄なり、そは團十郎髷なりなど、力めて賤業者の流を追ひて、たゞ後れざらんことを恐るゝ者の如し。口には風俗の改良を説き、公徳の養成を論ずるも、妻は優娼の衣服を學び、子女は優娼の歌曲を謡ふ。嗚呼何すれぞ世は悖理倒懸にして、彼の鵺の形に類するや。總て此の如く、社會風教の事に關する者は範を廟堂諸公、或は位置あり名望ある貴族社會より示し、天下の民庶をして、悉く之に據らしむべし。

八千草の花の盛りにきて見れば
野守は花のあるじなりけり
依平



敎の庭

九月五日兼題

川霧

天　東京市芝區新堀町三十五番地　和田さち子

かせわたる岸へのやなきかつちりて
うすきりおひくあきのゆふかは

評に曰、ゑたくみの筆にも、かくこまやかには、うつしゑがたかるへし。

地　肥後國菊地郡城北村　佐々小琴子

ゆふは川ゆふきりふかくたちこめて
あみのおやせもみえすなりぬる

評に曰、實景見るか如し。

人　茨城縣鹿島郡中野村　荒野たに子

大井かはさきりもふかしわらしやま
さくらのもみちいまかちるらん

評に曰、所から、とりあはせいとをかし。

甲之部

すみたかはおやせいは瀬きりはれて
ほの〳〵みゆるをつくはの山　武蔵　横田秋子

ほの〳〵となみのうききり末はれて
かはとにうかふうちのしはふね　大阪　桝田益子

一葉ちるきしのやなきもあききさひて
おはれふかむるさほのかはきり　東京　山本梓子

乙之部

つり舟のかけさへみゑすたつきりに
いとゝさひしきあきのかはつら　永井さい子

さひ年魚の下るかは瀬も見ゑぬまで
たちこその信れきしのあさきり　佐々有鄰子

とま舟にたてるけふりもたゝよひて
あさきりふかしよとのかはつら　坂本てい子

あさひさすたかねの雲はゝれぬれと
またよなのこすうちのかはきり　武田龜子

明わたるみねうちこむるあききりに
ゆくゑも見ゑぬ宇治のかはふね　衣笠澄子

川きりなとはりとなしてふなひとは
うきよのほかのゆめや見るらん　坂齋かほる子

すみたかは川瀬も見ゑすきりふかみ
きしうつなみのおとはかりして　椎野秀子

朝日さすたかねのかたは晴れそめて　ふもとをこむるあきのかはきり　椎野きよ子

さす棹のおとはまぢかくきこゆれと　きりに見わかぬ宇治のかはふね　園田婦美子

隅田かはきりたちそめてやまのはに　かくれもゆくかしらひげのもり　高橋松江子

さしのほるあさ日の山は見えなから　またはれやらぬ宇治のかはきり　穂積稔子

わたしもりよへはこたふる聲のみは　たちもへたてすあきのかはきり　服部萬子

川きりにすがたわかれとたらちねの　まさきくあれとよはふこゑする　瀧本春子

すみ田川なみのうききりたちこめて　またほのくらきあさほらけかな　高石登代子

すみ田川つゝみの尾花ほのみえて　かせにはれゆくあきのあさきり　當間みすの子

丙之部

流れゆくおともさひしきあきかはの　きしへもみえすたてるきりかな　德永廣子

とふ雁のこゑもしめりてあさほらけ　たちこめけりな宇治のかはきり　林　環子

ふるゆきもやかでなかけし山かはを　ふかくうつめてたてるあききり　村上操子

隅た川きりたちこめてりやうこくに　かゝれるはしも見えすなりけり　上原のぶ子

朝きりのふかく流かれてすみたかは　きしもなかすも見えすなりけり　田村多豆子

立ちこむる宇治のかはきりふかけれは　ゆきかふふねのおとのみぞする　田代艶子

川のおもはあさきりふかく立ちこめて　こぎゆくふねのおとのみぞする　田代綾子

聲のみをちかくのこしてよしのかは　ゆふきりふかくいかたこくなり　竹村竹與子

夕されはよとのかはかせふくからに　たえたえみゆるなみのうききり　千々波橘子

朝またきかはきりふかくたちこめて　ふねこぐひとやわけまよふらん　坂本悦子

うき霧のたえまたえまにあらはれて　くたすいかたのおとそきこゆる　佐藤玄子

川どにはあさきりふかくたちこめて　さほさしかねるせゝのいかたし　鈴山坩代子

朝きりはやまもとくらくたちこめて　たにのかは瀬のおとそさやけき　德永萬壽子

舟ひとのこゑのみもれておほゐかは　かは瀬もみえぬあきのゆふきり　德永識子

いつしかにあつさなかれて秋といへは　まつたちそむる今朝のかはきり　澤田春子

なれてこそを舟さすらめこゑはして　きりにうもるなよとのかはつら　瀧口貞子

隅田がはなかるゝみつもわかぬまて　あさきりふかきあさのすゝしさ　源たけ子

魚釣すと出てゆくちゝやたつぬらん　きりをへたてゝ子らかこゑする　岡山貝子

舟よはふきし邊もそれと見えぬまで
きりたちこむるあきのゆふかは　岡田美喜子

夕まくれふれよふこゑもかすかにて
たちこそわたれうちのかはきり　瀬戸ゑい

大かはのなかれのまゝにあさきりは
ふち瀬ともなくたちわたりけり　朝見里子

やなきちる岸のあきかせふきそめて
たえ〳〵はるゝさほのかはきり　横田音羽子

隅田かはくたすいかたもあさきりに
ほの〳〵見えてあきかせそふく　青木たま子

のほりゆく小舟のかけもたえ〳〵に
かはきりこむるみつのおもかな　松村あさ子

洲のあしのほのかに見えて川きりの
はれゆく今朝のおもしろきかな　谷口房子

ふれよはふこゑはかりしてあさ霧に
帆かけも見えぬ宇治のかはつら　篠田圓子

わかせ子はいまや野川をわたるらん
こまそいなゝくきりのあなたに　川畑常子

朝日さすたかれはゝれてほの〳〵と
きりたちわたる宇治のかはつら　川中千てつ子

きりこむる小川のほとりふくかせに
あらはれそめしあしのひとむら　新井春霞子

ほの〳〵とあけゆくそらのきりふかみ
たえ〳〵みゆる宇治のかはなみ　吹田たけ子

たち籠るきりやゝはれてもやひふれ
かすあらはるゝ宇治のかはきし　中舘やう子

船よするひとのころもゝ見えそめて
ゆふきりうすき宇治のかはつら　椎野ぬき子

船ひともしはしゆくてにまよふらん
ゆふきりこむる宇治のかはつら　椎野薫子

やなきにも見ゆるへき風はなかりけり
あさきりこむるよとのかはきし　大村豊子

いかたしはなにをしるへに下すらん
さほおとこもる利根のかはきり　戸賀崎治子

あきかせに隅田のかはのきりはれて
ほの〳〵見ゆるみやことりかな　戸賀崎久子

川のへのやなきをこむるきりのうちを
なかるゝ水のさやけくあるかな　稲原菫子

川きりにさまたけられてさやかなる
つきのかけさへうつらさりけり　伊勢村弥子

たちわたる夕きりふかしすみたかは
きしにふれよふこゑはかりして　財田とみ子

大井かはゆくせもみえすたつきりに
となせのたきのおとのみそする　山本兆子

富士川やなみのあやせのはやけれは
たつあさきりものほりかぬらむ　野中あさ子

ふれよはふつゝみも見えすすみた川
たえまなきまてたてるあさきり　野中靜子

まほかたほ見えつかくれつ川の邊は
むらきりはらふあきかせそふく　岩田春子

たちわたるきりにさをさす川ふれは
そらのうみゆくこゝちこそすれ　山田よれ子

しら鷺のむれゐるきしはほのみえて
きりたちわたるかものかはつら　山田稲子

たちこめてかはせもみえぬ夕きりに
　たゝしらなみのおとのみぞする　太田みつ子

水され棹ふれのゆくてもわかぬまて
　きりたちこむる宇治のかはつら　戸塚てつ子

あさまたきこきのぼれども霧こめて
　ゆくへも見えすよとのかはふね　苗田よし子

秋ふかみかはきりたちてあきぼらけ
　ふなひといかにまとふなるらん　川村まつ子

槃をほにかけてわたれるはつかりの
　すがたも見えぬ瀬々のゆふきり　片山ふみ子

宇治川の瀬々のあさきりふかければ
　まきのしまさへはるけかりけり　片山あや子

見るかうちに深くなりゆくかはきりに
　きしの木たちもかくれはてけり　吾妻ちか子

うききりにみる目まとひてふれよほふ
　こゑのみしけきうしのかはきし　雨森つる子

かは霧はいつるあさひにはれそめて
　あしまのしらほあらはれにけり　山口澄子

ふな人のこゑはまちかくきこゆれと
　すかたはみえすきりふかくして　岡田柳子

あさひ川あけてもくらき霧のうちを
　ふれさすひとのこゑそきこゆる　早川たれ子

あさきりはたかれをこめて音羽かは
　おとをのこしてたちわたるなり　三宅中枝子

うすれゆくすみたかはらのあさ霧に
　みえつかくれつふれそゆきかふ　河合ぬひ子

やま川をくたすいかたもふなひとも
　あさきりふかみさしやわふらむ　服部正子

きりはれてまつ原つゝくかはきしに
　うまのいなゝくあさぼらけかな　樋口孝子

たちこむる霧にふし家は見えねとも
　かはにうつれるさとのともしひ　甲斐たま子

川越えてわかふるさとを見かへれは
　名残り惜しくもつゆにかくれつ　櫻井力子

霧ふかみふなひとよはふこゑすなり
　とれのかはへもちかくあるらん　小島ひさ子

九月五日兼題

歸省中の感を記す

佐々有鄰子

あまさかるひなの里人の、たつきのわざは、男の弓はづ、女の手末といひつるは神代のことにして、今の大御代は、田夫は、むしろうちはやし縄をなひ、賤女は、蠶かひ糸ひき、紡績にいとまなく朝夕つとめいそしみて、國のため、天皇のため、富國の基をつきかためけるものから、四海波しづかにをさまり、學校を設立し、會社をむすび、八方に交易し、いよいよますます、田舍のすまひともおもほえず。日に月にひらけゆきて、はつかの年のうちに、かくも、繁花にすゝみつるかと驚かるゝも、大御代の露の惠の賜物なりけらし。あなあはれ、歸省中の美事は、これのみならず、海軍志願生あり、陸軍幼年學校入校生あり、大學校卒業生あり、大臣某君もありて、あまさかるひなの里曲の、むかしにかはりし、さまのいとうれしく、おもほえてなん。

桝田益子

学びの業も例の如く、夏のひまのあれば、みとせぶり、故郷に帰りぬ。まづ、かざいろのうるはしくすくよかに入らせ給ふは、嬉しさたとしへなく、庭の花樹みどりの楓、いとふどやかにおひしげり、垣根のさゆり、撫子の土はふ斗りなりしとおひ廣ごりて、しばしがほどに、かくまではとおどろく斗りになん。家ないでしころは、乳房ふくみて、むげに幼かりし末の妹も、はや、糸丈などゝかたはしいふもなかしく、あげまきなりし弟はいたくおとなびて、エビシとずして異國の數もつゞりうとぞ。都にてもかゝるな、まして、都に物しつるおのが身の、呉竹の世人となじく、せたけのみおひのびて、まだ、何のひとふしも学びねぬこそやさしけれ。さるにても、こゝたくの黄かれ白かれな惜します、背丈くろきいろ／＼の衣さへかづけて、物学ばせ給ふ父母のいつくしみは雲の島の峯より高く、硯の海の底よりふかし。こな思へば、や直のあらなみくゞりても、あはびしら玉かづき上んと、ひとへに、いそしみつとめざらめやは。

たらちねの恵みの露のなしへ草
袖はぬるとも摘んとそ思ふ

篠田國子

怠ると云ふにはあられど、夏休みとなりて、懸しき故郷の足乳根の御側に帰り来つる、其の翌朝よりは、例の起床の時間には、中中に、目さめやらず、稀にさめつるも、今少し／＼との、我儘より次第に時を移して、日高くなりて、やう／＼、顔洗ひ口そゝぎなどする、いぎたなさ、我ながらまづ、打ち驚かれける。朝飯終れば、弟の、浦山に登り給はずやと、いともやさしく、そゝのかすにぞ、強ひていなむも本意なきわざと思ひ、さらば案内してよと答へければ、さも嬉しげに出で立つ姿の[illegible]なさよ。木々の緑の

生ひ繁れる奥には。瀧の音とゞろきて、さながら我庭に昔な語るが如く、其涼しさいふばかりなし。かゝるが上に。折々、未だ巣にや入り殘りけん、來ん年の春ならではと、思ひ居たりし鶯の、聲の洩るゝも、いとめづらしや。夕つ方ゆあみし給り、離れ家の涼しき一間にて、父上の、み酌なしつゝ、四方山の物語り聞えあぐれば、殊の外悦ばせ給ふこそ、いとうれしけれ。皆々したゝめ給れば、母上の仰せに依り、日頃たしなめる玉琴かきならす、我が拙なき調べをも聞かんとてや、軒端の、なすの外に二つ三つ心ありげに螢飛ぶさまいとなかし。やがて月も昇りて池水に照り合ふけしき、いはん方なくめでたければ、父君、いかで面白き言の葉もがなと宣ふにぞ、とゝのはぬも又折からの笑草にとて、

風通ふ池の蓮の露の上に
宿るも涼し夏の夜の月

と口ずさみける、父上太き聲音にて、いかにも三十一文字と仰せられしこそ、いとなつかしけれ。又、或る時は、母君と、茶の湯生花の復習中々に床しある夜の事なりき。程近き河原に物しつるに、晝の程は田の草とりに、いそしみ居たる賤の男が、涼みがてらに魚をあさる、かゞり火の遠近に、水に移ろひて、云ひ知らず美くしきに、只に五百機たつる音さへひゞきて、あはれ此景色な、都の友にも見せまほしなどゝ、果は家路も忘るゝばかりなりし。

あゝかゝる楽しき遊びに時を移すも、早後三日四日となりぬ。大方の人は暑さに得堪へで、只管に、秋立つ日を待ち渡る物を、わらはのみは、今少し夏長かれと祈る、身勝手とや言はん、たらちねの君、今年も歸省なしたる形見に、何ぞ物せずやと、のたまひければ、さらば例の拙なき筆もて、唯々歸省中の、ありしまゝな記し置かばやと、上京の一兩日前に、かくはものしつるになん、あな恥かし。

此の度は、如何なる故か、いづれも拙く、要領を得ぬものさへ少からねば、其の多くは、沒書するの止を得ざる事となり、僅かに此の三篇を得たり。されど此れとてもめでたきにはあらず、撰者の遺憾まことに少からず。時や漸く、涼しく秋風身にしみて、燈火親しむべきのころともなれば、諸嬢奮勵し玉へかし。

種々

竹　　福井茂子

山陰におひたちぬれとおのつから
　たけはみさをそたゝしかりける

阿蘇山にのぼりて　　野口靜子

雷とおもふばかりに阿蘇がねに
　とゞろきたてるけふりはげしも

うづまきてたてるけふりのなかそらに
　石ふきあぐる阿蘇の神山

黑川の瀧をみて

おとにきくおともはげしき黑川の
　すがるが瀧を今日みつるかな

栃木温泉塲にて鶯をきく

夏山の青葉がくれに鶯は
　すぎにし春をしのびれになく

田秋家　　吉澤よし子

八束穗を刈りほす御田のゆたけさに
　瑞穗の國と人やいふらん

秋の露

源たけ子

ひまゆく駒の春の道　いつしかとなく夏草の
逝れる見れば忽ちに　草葉における秋の露
其の露消し久方の　月の桂に影あはく
御空を行や雁がれの　友よぶ聲ぞあはれなる
千草の床にきり〳〵す　夜寒をかこつ森かげの
木々のこずゑに風吹きて　紅葉先づ散るならひとや
頃しも秋の夕まくれ　うからやからの悲しみも
なげきも哀れ白露の　あしたを待たぬ夜嵐の
さそふまに〳〵まかせつゝ　歸らぬ路を只ひとり
彌陀の御舟に掉さして　君行かんとは思ひきや
悔の八千度百夜草　かれて再び生ひきつる
例も且はありときく　魂かへしたきものも
人のみなとや仇し野か　鳥部の山の夕けぶり
立ち消ゆ〳〵て跡もなく　悲しいかなや飛鳥川
行きて歸らぬ水面瀬の　水泡と共に果なくも
人の命は春の夜の　たゞ手枕の夢の間や
鬼を欺くますら雄も　やがて苔むす墓の下
現なき世ぞ哀れなる　かつてしきけば翁君の

いと若かりし其の昔　千々に心を砕きつゝ
花の旦も月の夜も　暫しも業をいそしみて
榮行く家の礎を　固め給ひしいさほこは
實に我が里の鑑なれ　さはさりながら世の中は
生者必滅會者定離　なに常住のものならむ
千々の寶を積みたてゝ　北斗の星は支ふとも
死出の旅路を誘ひくる　無常の風はふせがれず
百々の齢を常盤なる　みどりも深き松が枝に
住める八千代の足田鶴の　龜にたぐへて朝な夕
祈りし者の仇櫻　散りて亂るゝ色ぞなき
老翁の御影忍ばれて　胸の思ぞもゆるなる
かき流したる水莖の　跡は涙にかきくれて
君に手向けむ言の葉は　袂に落る露ならで
いとゞ外にはなかりけり　哀れ今日こそ悲しけれ
なげゝど甲斐はなきものゝ　哀れ今日こそ悲しけれ

手毬歌

日寺のぶ子

土佐家の先祖一豊が　織田に事へし其の始め
安土に馬を東より　賣りに來し者ありけるを
買ひたき人は多けれど　價の高きそれ故に
誰も買ふ者なかりけり　一豊家に歸り來て
獨り歎きて云ひけるは　われ今つかへす始なり
かゝる名馬に打乘りて　件に目通りなすならば
如何に名譽のきはみぞや　只それのみが我が家の
ほまれは高し主人まで　喜び給はんものながら

十両の黄金はおろかにて　わづかだになき悲しさは
實にや古人のいひおきし　四百四病のやまひより
金程つらき物はなし　あはれ悲しき我身ぞと
なげきにしづむ折りからに　側へに聞ける女房は
夫を慰めいひけらく　妾がつぐなひ侍らんと
金を出せば一豊は　思掛けなし常日頃
貧に苦む事あるも　包みかくして夢にだに
金のあること語らぬは　心強きも程ありと
怨みながらも喜べば　妻は答へていへるやう
主の言葉はさりながら　妾がこゝに嫁ぐ時
父の仰せに此金は　如何に貧苦に迫るとも
必ず出すな汝が夫の　大事の時に參らせよと
厚き恩に御手づから　鏡のそこに誠めて
下し玉ひし此の黄金　いつかは用に立つべきと
ひたすら秘めてまつ程に　ほのかに聞けば馬揃へ
都にあるも近しとか　若しもさあらん其の時は
これぞ天下の見ものにて　主は事への初めなる
斯る時こそ又なけれ　折りこそよけれ此の馬に
打ち跨りて見參に　入れ給へよと云ひければ
一豊深く喜びて　直に購ひ馬揃へ
勇み〳〵て出で立てば　數々多き其の中に
尋常ならずいなゝけり　信長遙に見そなはし
あつぱれ名馬誰が馬ぞ　仰せありしを一豊が
つぶさに申し上げゝれば　信長聞きて感心し
そちはよき妻持ちたるぞ　武士のたしなみ賢しと
知行を增され一豊は　是より次第に立身し
今も榮行く山の内　末の末こそ目出たけれ



發音練習の一方法

赤堀又次郎

口のまはらぬ子供に左に示すが如き類の文句を教へて、となへしむれば、一種の興味を有して、發音を練習せしむる効あり。

こゝにあげたるものは、昔より世に行はるゝものにて、めづらしからねど、發音練習の目的により、各地方の事情に應じて、更に種々のものを、新らしく作らせ、なほ益あるべし。

其のとなへかたは何れも、初はゆるやかに音を發して、次第にはやくいはしむるなり、其の中短きものは數同くりかへさしむるを要す。いづれも始終、音を正しく發せしむることによく注意すべし。

（貴公）貴公、貴公がきこうといへば、おれも、貴公を、貴公といはじや貴公。

（天狗さん） 天狗さんが、天窓から、鼻出して、はなたれて、のぞひてゐる、
これ、天狗さん、
なぜ、天窓から、鼻出して、はなたれてのぞひてゐるといつても、
やつぱり天狗さんが、天窓から鼻出して、はなたれてのぞひてゐる。

（法成寺入道） 法性寺入道前關白太政大臣を、法性寺入道前關白太政大臣といつたら、
法性寺入道前關白太政大臣がおこつたから
これからは法性寺入道前關白太政 大臣樣といはう。のう法成寺入道前關白太政大臣

(唄うたひ)唄うたひが、唄うたひのかどを、唄うたつてとほつたら、これ、唄うたひのかどをあせ。唄うたつて通るといつても、唄うたひじやから、唄うたひのかどでも、唄うたつて通るといつてやつぱり、唄うたひが、唄うたひのかどを、唄うたつて通つた。

(長持のうへ)長持のうへにあま米、あゝつぱ、

(辨慶)ベンケイ　ケンブツ　ゲツペイ　メンボツ

(おまへ)おまへの　まへがみ　さげまへがみ
おまへの　まへだれ　さげまへだれ

(鮨屋)鮨屋のすゝはきに、鮨桶へすゝがはいつて鮨かすゝだらけにあつた

(下谷)下谷の廣小路で東風がひゆうとふいて昆谷のおほりへ鶺鴒がひよつとおりた。

朝雲暮雲(一)

晴晨子

はしかき

はから〳〵あけゆく空の雲のたゞずまひ、花やかに、夕日さしそふ雲のすがた、灰色におも〳〵しき雨雲、紺青の空に、一はけ白く、輕げにたゞよふ雲、いつれおかしからぬはあき、大空の雲しあけくれ、われは、幾度か、之をうつさむと試みつ然も、自然の手に成れる色彩は、いかで、凡俗のわれらの筆にうつしうべき。われは、たゞ、あしたの窓、夕の軒端に立ちて、さま〴〵にかはりゆく雲を眺めやりつゝ、いつも〳〵いひしらぬ感にうたるゝのみ。

されどこれとは、事かはり、やうたがへれど、人の世にたあびく雲、人の心にゆきゝする雲、こ

れら、はた、雨風の勢をふくみ、雨歇の影をやどし、春秋のうつりかはりにしたがひ、晴れたる曇りたるそのをりふしにつれて、さまざまの色彩をあらはし、それぞれの姿を成せり。これをうつさむは、凡手の、よくし得べきにあらず。われ、今こゝに、わがおぼつかなき眼を以て、いがこゝろに去來する朝雲暮雲のたゝずまひを見、おぼつかなき手をもてうつしとらむとす。おほけなきわざなるべし。されど、わがこの寫生帳の一ひら二ひらは、見ぬ人もなくてすてられぬとも惜しからじ。われは、唯、わが心のゆくまゝに、筆をとるのみ。

さめ〳〵と
泣く聲にて
女郎花



月下のをもひ

夕日の名殘庭の柳の梢にのこりて、彼方に一むら、こなたに一むら、淡くたなびける雲のたゝずまてもやう〳〵夕くれの色ふかうなりゆく。

風そよ〳〵と吹きいでたれば、窓に倚りてすゝむに心地いとすが〳〵し。

ふと東の方をながむれば、わかつき方の影とも見まかふべき月夢よりも淡くかゝれり。西の空の光やう〳〵蒼くなり、紫になり、くろずみゆくまゝに、東の月影の橙黄色やう〳〵濃くなりまさりつゝ、つひ

に、かゞやきいでたる光は、何とかたとふべき。月の光は、大空にみちたらひたる、それもよけれど、わづかに、ほのめきいでたるこそ、ことにあはれふかけれ。

月の光明らかになりまさりゆきて、窓に倚れるわが影長く疊の上にやどれり。物靜なるあたりのけはひにもよほされて、われは、また、例の物思にしづみぬ。

浮世のさまをふかくも知らぬ無邪氣なる人々とたちましらひて、明しくらす。朝夕はまぎるゝとも無く、物にまぎれてあれど、かく一人のみある夕ぐれなどは、げに、心さびしくおもはれて、深くもたどる愁の森の、はてをも知らずさまよふは、何の心ぞ。われもしらず。

すぎこし方、はた、行末のあらまし、今は世に亡き父母のみかけ、遠く隔たれる友の上、心は千々にみだれて、想はとさまかうさまに迷ひぬるも、はかなしや。しかも、今夜は、ことに一人の友のしのばれて、なつかしさいはむ方なし。

なにとなくゆふべの空をながめいでゝ
人なつかしきわかおもひかな

友は、われよりも少しく年若ければ、われはなつかしき弟ともおもひて語らふに、友も、はらからの如くしたしみつ。はかなき事まで、語らふそのたのしさは、われにとりて、こよなき慰なりけり。思ひにくれて心くるしむをりなども、打むかふにぞ、先心ははれぬる。ことに友は心を文學によすること深ければ、わがをり〳〵のはかなき言くさをも、よろこびて耳かたむけつ。われは、やさしき友を得て、なつかしき弟を得たるなり。われは、この友の上を、しばしもわすれかねつ。

友とわかれて、今は、十日をすぎたり。あかつき

方の空はのくらきに、麥藁帽打かぶりて、白地のひとへきたる友が、「さらば、しばしわかれまゐらせむ。君も、暇だにおはさば、跡おひて來ませ。」といひいでたる、なつかしき聲音は、折から身にしみて、今も猶きこゆるやうなり。われは、門にたちて友の後影の柳かくれにみえずなるまで見おくりつゝたゝずみき。

松風たえずさゝめきて、うちよする浪の音すゞしきわたり、月はそこにも淸かるべし。くまもなくすみたる大空のかなた、紫たちたる遠山の上にかかれる月の光の、千重の浪よる海原にてりわたるほど、友やいかにながむらむ。例のすゞしきまなさしに、月のかげうちまもりつゝ、欄に倚りてあるらむさまよ。

乞食

三石直子

乞食三日すれば止められぬなど、まさか、夏の日の、目も眩らむばかりの酷暑に、わらはに、手も足もこそ出で居れ。雜巾綴ぎ合せたやうな衣服、あつくるしさ思ひやられます。而かも笠もかぶらず、竹の折樣のものにすがりて、あわれとも思召さばど、家毎に乞ひあるく樣、如何なる鬼の心あれば、其も止められぬものと思うたのでせう。

や、寒うなる頃から、鼻汁、普通の人ならば穢げに見えませうが、なか／＼、涙の種で御座ります。雪など降りて、往來も稀なる時に、例のつゞれ一枚で、如何して凌がれませう。手を交々息であたため、或は、足をなでまはし、或は、汚き手拭の破所から、蓬々と出で居る頭髮の雪を拂ふ。折々

は、うちめしげに空をながめては、ふるひ〳〵さ　いのだらうか。まよふころ、犬なればとて、これが止められぬ、羨しいものと思ひませうか。

この人の妻は如何して居ますのでせう。居るのなら、まさかに、あんな憂目も見せますまい不幸にも、先立たれたのでがな御坐りませう。子供も御坐りませうに。幼い兒でゝもあつたら、さぞ。

まして、吹雪の時など、草の陰木の下に、彼のまゝ一夜をすごされるだらうか。さても、明日の朝は、如何にして何地へゆくことやら。兄弟はなからうか。親族のものもな



よしや、如何なる罪の報にもせよ。斯くまで苦めても、まだ、ゆるされぬものだらうか。何故、神様は、御助けなさらぬので御坐りませう衣食の贅澤などにばかりはこつて居る人たち、斯様いふ人に、何故氣をつけてやらぬのでせう。

もし、彼は、愚鈍から彼様なつたので自業自得爲方がないといふのなら、少々、説が御坐ります。幼兒の頑是ないのが、椽から落ちて怪我しても自業自得だといふて、注意せずに居られますか。川端に這ひだして遂どんぶり、何と其様に

無慈悲にすて丶置かれるものでは御坐りませぬ。幼いもの弱いもの憐なものには、よく／＼注意して助けてやるのか、普通では御坐りませぬか。如何で御坐ります。是までのものは、吾人の力にかなはぬとしても、これから後は、斯様いふ不幸な人のないやうに、氣をつけて上げなければ、なりますまい。吾人は、家に在つて、平和圓滿に世を過させなければならぬ義務があると同時に、社會に於いても、なるたけ、不幸な人の少くなるやうに盡力せねばならぬ責任がござります。

本社發行の高等女學校用讀本七の巻八櫻のすゑに。

凡、ちからあらむ人、花を賞するに、心あらば、己がため、人のため、國の内、又は、たよりちかき山に、さくらを多くうゑて、美觀をなさしむべし。

といふことが御座ります。櫻のことも御尤ですが、この同じ心をもて、彼の憐むべき人々のためにもと、思ひついたので御坐ります。



雑録

○竹の園生

◎天恩海岳

天皇陛下には、昨年、清國事變に際し鋒鏑に斃れ、若しくは病魔のために襲はれて死沒したる者に對しては、天皇陛下特に御軫念あらせ給ひ、過般侍從武官長を經て、兒玉陸軍大臣に右に關する將校同相當官、高等文官以上は、各自生前の寫眞を、又一般の軍人軍屬は、死亡の年月地名等を詳記したる姓名簿を、御手許に備へ置かせらるゝ思召な

るを以て、取調べ奏上すべき旨御沙汰ありしが、此程將校同相當官の寫眞は既に取揃へ、岡澤侍從武官長の手許迄差出し、名簿は目下調製中なれば、遠からず奏上せらるべしと聞けり。まことに恐おほき事ならずや。

因に此の事件の當初、大沽砲臺に於て名譽の戰死を遂げたる服部海軍中佐、及、菅同大尉に對し、去にし廿三日左の如く、特旨贈位の御沙汰ありたり。

故海軍中佐正六位勳五等功五級　服部雄吉

贈正四位(特旨を以て位階を追陞せらる)

故海軍大尉正七位勳五等　菅文三

贈正五位(同上)

その靈、以て瞑すべく、如何に、天恩の厚きに感泣するならん。又、去ぬる三月十五日を以て着手相成りたる、第二振天府御造營の工事は、其の後着々進捗し兩三日中には、家根を葺き終り、内部の搆造も、來月中には悉皆竣工の筈なれば、遲くも、十月中旬には、北清事件の紀念品陳列の運びに至るべしとぞ。

◉御救恤

豫て新聞紙に見えたる如く本月二日、臺灣總督府管下に、暴風雨ありて、被害尠からざる趣かしこくも、聞召され、御救恤として、兩陛下より金七百圓御下賜相成りたりと。今更ならねど、ありがたき事にこそ。

◉日光御消息

東宮同妃兩殿下とも御健勝にして、東宮殿下は、隔日位に御乘馬あらせられて御運動あり、又妃殿下御同伴にて、御遊覽等あらせられ、去にし十七日午前には、供奉員を從へて、朝陽館に御遊行あらせられ、裕仁親王殿下に御對顏、親く御成育の御容子を御覽ありて、毎もながら、御滿足御喜悦

一方ならざりきと。又十八日には、午前四時御出門、御籠に召して、數名の供奉員と共に日光の市街を離る三里半ばかりの、如峰山中長瀧を御遊覽の上、御歸邸遊ばされ、廿日には、午後三時御出門下河原通より、大谷川沿岸を御散歩あらせられて、四時御歸邸、更に六時三十分腕車に召して、山内の朝陽館へ成らせられ、迪宮殿下に御對顏あらせられ、而して、又、廿三日には、午後二時、御出門にて山内御用邸へ成らせられたる上、迪宮殿下と御對顏遊ばされ、又た廿四日には、午前八時御出門數名の供奉にて、若子の瀧へ行啓、一の瀧の勝區まで御覽あらせられたる後、御歸途含滿淵の三宮式部長別莊へ御立寄、十一時頃御歸邸あそばされたりと、承はりぬ。



◉迪宮殿下

皇孫殿下には、日光へ成らせられてより、益々御健勝に渡らせられ御乳の如きも、著しく御多量に召され、日に增し御成育あらせらるゝ趣きにて、去にし十八日には、午后一時御出門、中山通を御逍遙あそばされ、法引院内ある、樺山家の別莊へ御立寄あられられたりと。

因に、御歸京期は、愈々、九月三日午前十時四十五分日光發、午後三時上野着濟

車にて、御歸京あらせらるゝ事に御治定相成り、既に、日本鐵道會社へ御內達ありたりと、又、御都合によりては、皇太子同妃殿下にも、同時若くは兩三日後、還啓あらせらるゝならんと、拜承せり。而して、迪宮殿下には、來る十二月中旬より、御避寒あらせらるべき御都合にて、目下土地撰定中なるが、多分は舞子に御決定相成るべしと、承はれり。

◉內親王殿下

豫て、箱根離宮に御避暑中なる常宮、周宮、幷に、宮の下御用邸の富美宮、泰宮各內親王殿下には、其の後何等の御障りもなく、日夜の御學問、及時折の御運動等少しも怠らせられざる由にて、佐々木、林兩御養育主任よりは、一週二三回宛、御狀況を上申し居れる由なりしが、其の後、小田原なる御用邸に御滯在遊され、今五日御還京あらせらるべしとぞ。

◉東宮御誕辰

去にし八月三十一日は、皇太子殿下第二十三回の御誕辰に相當せしを以て、目下御避暑中なる、日光御用邸に於て、御式を擧げさせ給ひ、天皇皇后兩陛下より交魚を賜ひ、又有栖川宮殿下を始め奉り、伊藤侯、土方伯其の他在日光、文武官は、參賀申し上げ、續いて、御內宴を開かせ給ひぬ。因みに、日光町にては各戶に國旗を揭げ夜に入つては球燈を點し、且數十發の煙火を打揚げ、祝意を表し奉りしと。而して、此の佳節に付、在箱根の各內親王殿下、並に東京各皇族殿下を始め奉り、各大臣、大臣待遇者、樞密顧問官、親任官、勅任官、奏任官、奏任官總代、東京有位有爵者、及び在京都の山縣侯、各華族、舊女官其の他學習院、華族女學校等よりは、賀表若しくは、御祝電

を日光御用邸に捧呈したりといふ。

●●●●●●●

●故朝彦親王御祭典　去にし廿四日は、久邇宮朝彦親王御祭日に相當せしを以て、鳥居阪御邸及京都御本邸に於ては、嚴かなる御祭典を行はせられ、東山の御陵には、目下御滯在ある鳩彦王、稔彦王及賀陽宮、同妃各殿下を始め、高崎知事、中川末殿助等參拜せりと。

●●●●●●●

●故二品守脩親王卅年祭　去ぬる九月一日は、故梨本宮二品守脩親王の三十年祭に相當するを以て、當地御本邸に於て、御祭典を行はせられ、尚十三日には、京都泉山なる御墓前に於て、御祭典執行に付、守正王殿下は、十一日を以て、同地に赴かせらるゝ由に承はれり。

●●●●●●●

●閑院宮殿下の馬匹御覽　閑院宮殿下には、去ぬる廿五日札幌眞駒内牧場に御臨幸あらせられ御馬車の牧場に著するや、池田場長は御案内申上げたるに、殿下には、器械庫、牛舍まで隈なく御覽あり、豚舍は甚だ不潔なればて、御辭退申し上げしに、御頓着なく、不潔の中に入らせられて、一向御厭ひの色もなく、牛豚の生長を細やかに觀取はれしには、隨行の人々にして、日頃家畜の念慮に乏しきものまで、何れも感奮したりと、御巡視一順にして、豫て設けの御席に著かれたれば、場丁は、一頭づゝ牝馬より先に曳き來りて、御覽に供し、殿下には一々其の名號を書き止められ、詳細なる御下問ありしに場長は之に御答へ申し上げ、牝馬十餘頭の御覽終りて、同場產幼駒中特に良馬の聞えある山村、山旭（共に三歲）の二頭を御覽あり、山旭には、特に步容をとの仰せあり、花襲、第五、第八ポップ、後志等の種馬の御覽終り、後志、初蕾の速足を御覽に供したり。後志號には、同場員陸軍騎兵特務曹長坂本鐵男氏之れに騎し、最初殿

下の御前にて馬を進め、敬禮を行ひ、先づ並足より、次第に歩度を速やかにし、得意の技倆を振ひたるに、運動節に合し、馬蹄空に浮き、宛然風の葉上を渡るが如し。此の時殿下には、嘆賞の聲を洩され、隨行の人々も感に堪へて陪觀したり。次に初番には、場員坪内傳太郎氏跨りて、獨得の大速足を試み、輕快なる運動を爲したるに、是また御嘆賞遊ばされ、終ると共に御退場あらせられたりとぞ。

●久邇宮純子女王　正五位子爵織田秀實氏へ御歸嫁の勅許ありたる、邦憲王御妹純子女王殿下の御婚儀は、來る十二月中旬を以て、擧げさせらるる御豫定にて、御調度は、宮内省御用達玉寶堂、飯塚伊兵衛外二十五名に、調進方を命ぜられ、目下御準備中なりと。

○心の錦

●貞婦　鳥取縣八頭郡野町村藤原源七の長女むらは、去る二十九年頃同村の川口松藏、弟賀藏なるものを聟養子として、貰ひ居りしが、如何なる都合にや、家督はむらの弟が相續し、賀藏は離縁となりしより、むらは共にと云へど、父源七は勿論賀藏も許さず。兼て孝心深きむらの事とて、止むなく父の許に居りたれど、一度妻よ、夫よと、云ひたる中なれば、賀藏の外に、夫はなしとて時時再縁の談はあれど、悉く之れを斷り、貞節を守り、常に影ながら賀藏の身の上の事のみ案じ居りしが、賀藏は去る三十一年頃臺灣膨湖島にて、巡査を奉職し、服務中眼病に罹り、大阪迄歸り、入院して治療せしかど、其の効も見えず彼れ之れする中に、貯へもなくなり、止むなく郷里野町村

に歸り、兄松瀬の世話になり、非常に困難し居ることを聞くや、むらは直ちに野町村へ尋ね來り、介抱せんとせしが、一旦離縁せし身と云ひ、且つは所詮全快の見込なき此病ひ、加ふるに貯への一つもなき身なれば親切は難有けれど、父の許に歸るべき樣申聞かすと雖ども、むらは一向聞き入れず、強いて介抱することゝなり女の柔弱き手一つにて、病人を介抱の傍ら、賃仕事をなして、少々の金子を得、夫れにて夫の好むものを買ひ與へ藥を求め　温き日は郊外へ負ひ出づるなど、殆ど寢食を忘れての介抱に其の効忽ち現はれ、此頃は容体大に宜しく、晝夜の區別位は、出來得る樣になりしを以て、むらは喜び勇み益々介抱に怠りなく身心を盡し居れりとは、美しき限りにこそ。

（富士子）

●忠女●　葉室須磨子は、熊本縣、肥後國菊池郡高野瀬村の盲人、葉室豐一が次女なり。二十三歳の時に、同郡、隈府町士族右田常信の二男右田常三郎明治九年出生せしにより乳母として、雇入れしが、嬰兒の養育法を、信實に晝夜の別なく、忠勤せし年月つもりて、常三郎の尋常小學校に入校するや、朝はつれゆき、夕はつれかへり、全身を粉にして勤たり。三女藤子をも、日々尋常小學校につれまゐりて、教訓をうけしめたり。四男右田常人をも、同樣に昇校往來の供をなしぬ。五女八千代子にいたりては、一入心を用ひて、昇校の出入に氣をつけけり。兄弟姉妹の四人ともに、尋常高等小學の兩科を、卒業せしめたるのみならず、明治三十三年の五月より、三女の藤子、大患にかゝりしを、須磨子が、心配非常にして、晝夜衣帯をもとかずして、看護せししるしあらはれて、今は全快せり。是ひとへに須磨子がちからあ

づかりて大なりといふ。須磨子が、忠勤の事件は明治九年、右田家に、雇いとられしより、明治三十四年の今日まで、二十六年間の久しき月日、其の行狀筆紙につくしがたかりしが、本年五月五日の午後十時病死せり。享年四十八歳といふ。此の情淡き、世の中に。此の情濃き、女子あるものは感心也。死後になりて、右田家より。其の筋に。此の行狀を。上申せしといふ。（佐々豊水）

○教の栞

●女學生の寄宿舍　大日本婦人教育會にては、近頃男女學生の風儀兎角正しからず、且女生徒に就ては、針小棒大はまだしもなれど、全く無根の事柄をすら好んで云ひ傳へ、また筆にする輕薄者流の多きより、益々完全なる寄宿舍の必要を感じ、會長毛利公爵母堂、及、副會頭鍋島侯爵夫人、その他主なる會員諸氏の間に、その議熟し、差當り赤阪表町二丁目十三番地なる、同會事務所に、女生徒の寄宿を許す由、なほ同寄宿舍は、女學校教育の缺點をも補はん爲、適當の監督兼教師を置きて、女生徒をして日常家庭の實務に習はしめ、父母の膝下にあると等しく、和樂の中にその業を終えしむる目的なりと、これぞ目下の急務なるべき。

●高等教育會議議員　過日文部省に於て、執行したる、高等教育會議議員改撰に當撰したるもの、府縣尋常中學校長、高等女學校長總て六名なり。其の内最高點者に就き文部大臣は、推薦する處ありしが、十五日左の三氏任命されたり。

東京府立第一中學校長　勝浦鞆雄
縣立宮城縣第一中學校長　下條幸次郎
東京府立第一高等女學校長　伊藤貞勝

家庭の注意

こは、肥後の佐々豊水氏より、菊池小學校長が、生徒の父兄に與へたるものなりとて、送られたるものなり。世の父兄母姉たる人、是非一讀の必要あるを信ずその文に曰く、

生徒の風紀を善良ならしめんには學校と家庭と一致協力して教訓の道を同くすること最も肝要の事あれば御家庭に於ても左に擧げし件々御熟覧の上十分の御注意あらんことを請ふ

◉家庭の注意

一、家庭においては生徒の日々習ひ得たる學科につき必ず二時間以内の復習を課せられたき事

二、朝夕出入の禮は正しく實行せしめられたき事

三、毎朝學校へ出づるには始業の三十分前に着するやう見はからひ出席せしめられたき事

四、學校往復の途中に於いて喧嘩爭論をなし又は農作物公共物等に障害をなすことを見聞せられなば直に學校へ通告せられたし

五、生徒の病氣缺席遲刻早引等の場合はすべて保護者より事情を明かにして屆出られたき事

六、日々歸宅の時間に注意しもし例刻にたがはゞ必ず其理由をとひたゞされたき事

七、生徒の外出するときには必ず行先と用事とをとひたゞされたきこと

八、學校のことを話す折りには注意して之をきゝ其話のよろしきところは之をほめはげましあやしきふしあらば直に學校に出でらるゝか又は通信簿にかきてとひあはされたき事

九、生徒の清書、作文、筆記帳、通信簿、など折々家庭に於て檢點せられ成蹟の良否によりて適宜にいましめられたき事

十、生徒の中には一時の譴責をのがれんが爲に口實を設けて其惡をおほはんとするものあり家庭に於ても心を用ひられたきこと

十一、小學校に於て生徒の喫烟することをかたく禁ずるは勿論政府も未成年者喫烟禁止法を公布して實施せられたることなれば家庭に於ても嚴重に取締せられたきことなり

十二、幼時より節儉の徳を養ふは最肝要のことなれば不用のもの又は無益のかざりもの若くは高價に屬するものは必ず持たしめざるやうせられたきこと

十三、學校の用具はなるべく廉價なるをよろしとすれども形の不完全なるものを持たしめざるやうせられたきこと

十四、衣服は筒袖に袴を着けしめ校章付の帽子を冠らしめたとひ祝祭日其儀式擧行の折といへども決して絹衣を服せしめざるやうせられたきこと

十五、學校用のカバン風呂敷等には決して玩具類を入れしめざるやう注意せられたし

十六、男生徒には日傘襟巻手袋等を用ひしめず羽織のひもは成るべく短くして小なるものにせられたき事

十七、大祭祝日には国旗をかゝげ成べく赤飯なりとも炊ぎて祝し奉られたし又學校の儀式にも御繰合せにて參列あらむことをのぞむ

十八、教科用書籍に紙部帳の不揃は教授上甚だ不便なれば入用だけは速かに求めしめられたきこと

十九、授業料を生徒に持しむるときは金員を分書面の金額と合せ一纏めにして巾着又は袋に入れしめ途中にて遺失することなきやう深く注意を與へられたし

明治三十四年七月

菊池高等小學校長　米田政徳

○桐の一葉

●舊琉球藩主の薨去　去月來病に罹り、飯田町の自邸に於て、療養中なりし、舊球琉藩主侯爵尚泰氏は享年五十七歳を以て、十九日午前七時薨去せられたり、其の略歴左の如し

天保十四年十月八日生▲嘉永元年五月八日琉球王の位に即く▲慶應二年八月廿七日清國冊封侯使來封中山王▲明治五年九月十四日使臣尚健副使宜野灣親方朝をして賀表を上り貢物を獻ぜしむ▲冊封爲琉球藩主一等官侍遇列華族賜公宅東京市飯田町▲明治十二年四月四日琉球藩を廢して沖繩縣を置く▲四月七日侍從富小路敬直を沖繩縣に遣され尚泰を東京に召す▲五月二日病あるを以て長男尚典をして代て上京せしめ上京の期を緩くせんことを仰ふ▲九月六日上京同十三日參朝叙從三位辭令間祗候仰付金祿公債證二十萬圓を賜ふ▲明治十八年授侯爵▲二十年十二月叙正二位▲廿三年十月貴族院議員に列す▲廿五年七月從二位▲卅年七月叙正二位

▲特旨　薨去されたる其の夜、特旨を以て位一級を進め、從一位に陞叙せらるゝ旨御沙汰ありたりと。

▲御見舞　侯病氣の趣聞召され、其の薨去に先たち、兩陛下より御見舞として、御菓子一折を下し賜はりたり。

▲祭粢料下賜

尚泰侯薨去の趣 天聴に達し祭粢料として左の如く下賜相成たり

一金五千圓　　祭粢料

右に付き尚家親戚今歸仁朝和氏は、去にし廿二日午前十一時宮内省に出頭、近藤書記官より拜受し、御禮を申上げて退出せり。

▲尚泰侯納棺式

尚泰侯の遺骸は、去にし、廿三日午後七時半、出棺、同十時新橋發汽車にて、沖縄縣へ送還するに付、廿二日午前八時より、其、納棺式を行はれたりと。

▲尚泰侯遺骸送還

舊琉球藩主麝香間祗候從一位侯爵尚泰氏の遺骸は前記の如く、廿三日午後七時卅分馬車にて、麴町富士見町の本邸出棺、同八時四十分新橋停車場に着せり柩は、長六尺八寸、幅三尺高四尺の白木作り、寢棺にして、四隅に厚房を垂れたる白緞子を以て之を覆ひ、未亡人松川、嗣子尚典氏、喪服にて陪乘し、孫尚昌氏を始め、親戚今歸仁朝和、護得久朝惟、沖縄青年會總代、諸見里朝鴻の諸氏其の他故舊知已五十餘名は、馬車或は、腕車にて之に隨へり。停車場入口には、受附を設けて、井上宮内省内事課員外數名斡旋し、見送人は、此所に就て入場劵を受取り、一同プラットホームに入りて、見送りたるが、柩は別仕立一等車に移して、家扶及侍女四名之に侍し、尚典氏外五名は、次室に入り、未亡人を始め女性一同は二等車を、他は三等車を借切りて搭乘し、定刻を以て發車せり。其の神戸到着は、廿四日午後六時卅六分にして、午後四時入港の球陽丸に移し、即夜出帆されたり。當日新橋停車場に送葬したるは、田中宮内大臣、海江田顧問官、川口次官、伊藤式部官主事、平松子爵、山本日本銀行總裁、高島嘉右衞門、日比沖縄縣書記官其他沖縄青年會六

十一名にして、伊藤候、九條公、芳川遞相、曾禰藏相、大隈伯、佐々木、高崎、蜂須賀、岩倉各顧問官、田尻會計檢查院長、香川太夫、二條、毛利兩公、千家知事、徳川、伊達、黒田、細川、淺野各侯、南部伯、井上勝子、北條侍從、三井八郎右衛門、益田孝等諸氏は、代理を出したりと。

▲勅使差遣　廿四日夜球陽丸にて、神戸を發したる尚泰侯の遺骸は、海上恙なく琉球に到着し、廿九日首里區金城なる王陵に於て葬儀を執行したり。右に付、奈良原沖繩縣知事を勅使として、當日同邸に差遣はされ、白絹五匹及供物等を下賜せられたり。

▲侯葬儀　去にし廿九日午後二時、那覇發電にて左の如く葬儀の模樣を報じ來れり。

勅使奈良原知事、午前十時首里尚邸に參向、令息尚典出迎へ、下賜幣帛白絹供物等拜受、午後一時金城に於て、エンメイ寺貫主ソンカン師大導師と、爲り、僧侶三百五十名讀經禮拜、未亡人、親戚、舊臣、青年會員、無慮一萬人餘、會葬の丁重なる葬儀を行ひ、終つて玉陵先瑩に埋葬したりと。

●各府縣蠶業の發達　蠶絲事業が非常の發達をなしつゝあることは、今更申す迄もなきことにして、試みに三十三年度の收繭額を、十年前即ち二十三年度の收繭高に比較すれば、三十二割の増加あるが、更らに各府縣の收繭額を對照すれば、發達の割合最も大なるは、靜岡、高知、香川、三重、千葉の諸縣にして、何れも百割以上に達し、又其に増加額の最も多きは、長野、群馬、愛知、福島、靜岡の諸縣にして、其の増加額何れも九萬石、乃至三十餘萬石に達す、而して進歩の最も遲々たるは、秋田、長崎、岩手、青森の諸縣なる由。即ち左の如し。

道府縣	明治二十三年 石	明治三十三年 石	比較増加
北海道	一、一四二	三、七三四	二、五九二
東京	一、三四二	八七、〇九八	九八、七五六
京都	一六、〇九七	四五、八六一	二九、七六四
大阪	九三五	四、九三三	三、九九八
神奈川	六五、八七〃	七九、五七六	一三、七〇一
兵庫	二三、六九一	五六、三八四	三二、六九三
長崎	一、四五九	二、五三八	一、〇七九
新潟	二六、六〇一	五八、三五四	三一、七五三
埼玉	七〇、九〇八	二〇二、五三〇	一三一、六二二
群馬	一〇六、〇七八	二七二、八五七	一六六、七七九
千葉	四、九六六	五五、二五〇	五〇、二八四
茨城	一四、三〇二	九二、四三四	七八、一三二
栃木	八、八八四	三七、六七二	二八、七八八
奈良	九八一	一一、八九三	一〇、九一二
三重	三、九九五	五〇、六九六	四六、七〇一
愛知	一四、〇八七	一一二、四五六	九八、三六九
静岡	五、六二八	一〇一、〇六二	九五、四三四
山梨	四〇、五二七	一〇四、五四七	六四、〇二〇
滋賀	二六、三二九	九六、七五三	七〇、四二四
岐阜	四四、〇一六	一一八、二九二	七四、二七六
長野	九四、〇一八	四二三、六九八	三二九、六八〇
宮城	二六、八一二	六〇、七七五	三三、九六三
福島	一〇四、八二一	二〇一、六一三	九六、七九二
岩手	一九、九九九	三六、九四九	一六、九五〇
青森	一、一五五	二、四三四	一、二七九
山形	五五、二五七	一〇三、八八〇	四八、六二三
秋田	八、五〇〇	一四、三六〇	五、八六〇
福井	一二、八二六	三六、六四一	二三、八一五
石川	一二、五七一	三一、八六四	一九、二九三
富山	六、四二四	二〇、七七五	一四、三五一
鳥取	四、八三一	二四、六四八	一九、八一七
島根	四、五一一	二三、〇五六	一八、五四五
岡山	三、三五八	一七、七一七	一四、三五九
廣島	二、八八一	九、一六五	六、二八四
山口	一、五五一	六、二四九	四、六九八
和歌山	一、六〇六	一二、七八六	一一、一八〇
徳島	一、〇〇九	七、六八八	六、六七九
香川	一五六	二、〇三一	一、八七二
愛媛	二、〇二〇	一八、四七七	一六、四五七
高知	一、五五七	二三、一八八	二一、六三一
福岡	二、七八八	八九、〇五〇	八六、二六二
大分	六、〇九七	一八、五九七	一二、五〇〇
佐賀	一、三八四	七、〇五〇	五、六六六
熊本	三、一二五	二三、九四五	二〇、九二〇
宮崎	一、六七九	一一、五七四	九、八九五
鹿兒島	一、七七三	九、三三一	七、五五八
沖繩	……	二五三	二五三
計	八六〇、五五七	二、七五二、七一四	一、八九二、一五七

◉鐵道哩數と車輛數

全國官私既設鐵道哩總數、三千六百四十五哩七十

六鎖にして、之を細別すれば、左の如し。

官線	八百四十二哩三十一鎖
東武	二十四哩六十三鎖
甲武	二十六哩七十七鎖
青梅	十三哩
上野	二十一哩
房総	三十五哩六十二鎖
北越	八十四哩五十二鎖
中越	十八哩四十七鎖
豆相	十哩五十一鎖
尾西	十五哩四十六鎖
関西	百四十八哩二十四鎖
奈良	三十八哩十五鎖
南和	十六哩六十鎖
河南	六哩六鎖
西成	三哩五十二鎖
阪鶴	六十八哩三十三鎖
播但	三十哩六十二鎖
伊豫	二十六哩六十二鎖
中国	三十四哩七十六鎖
九州	三百二十五哩七十八鎖
北海道	二百〇三哩五十一鎖
日鉄	八百六十九哩十八鎖
岩越	三十九哩十一鎖
川越	十八哩三十六鎖
佐野	九哩五十六鎖
総武	七十二哩二十五鎖
成田	二十四哩五十五鎖
七尾	三十二哩四十二鎖
高野	十哩四十鎖
豊川	十三哩三十六鎖
近江	十一哩七十二鎖
参宮	二十六哩十一鎖
大阪	四十五哩二十四鎖
南海	三十八哩七十六鎖
紀和	十三哩三十六鎖
京都	二十二哩十六鎖
山陽	二百八十哩五鎖
讃岐	二十七哩十九鎖
徳島	十八哩二鎖
豊州	五十二哩五十四鎖
唐津	十八哩十四鎖

又、機関車、客車、貨車の総数を細別すれば、即ち、

社名	機関車	客車	貨車
官線	三三七	三一一五	三五六〇
日鉄	二八九	八一六	三三二六
伊豫	六	二六	三〇
山陽	八五	三二二	九四一
甲武	一一	四二	一六六
大阪	二〇	一一五	一八三

讃岐	一〇	七三	六二
九州	一一五	三〇四	三五五八
關西	五一	二六二	四九五
北海炭	五一	七八	一二〇八
參宮	五	五六	四四
佐野	三	一五	五四
總武	一九	八〇	二三〇
播但	六	二六	五七
青梅	三	一五	七〇
川越	三	一二	一九
豐州	二〇	五一	五九五
奈良	一二	九一	一〇一
道後	二	九	一一
房總	七	二八	八〇
南和	三	二八	一一一
南豫	二	一二	八
成田	四	三五	六〇
阪鶴	一三	四〇	一六二
京都	五	六〇	七〇
中越	三	二三	三八
北越	一二	七四	一九六
上野	五	一七	六〇
豐川	三	二九	二五
南海	一八	一一六	八七
高野	四	二一	三三
尾西	三	一八	二四
西成	二	二三	二一二
紀和	四	二〇	二九
七尾	四	一九	五一
豆相	二	一一	一二
近江	二	二八	一二〇
岩越	五	一八	六一
唐津	五	一五	一八四
中國	四	二五	一二八
德島	三	二五	三六
河南	二	一四	二五
東武	八	三八	五〇

●竹の塗箸は衛生に害あり●●●●●●●●●●　このほど警視廳に於て、市内某商店より竹の塗箸(赤と黄の塗り分)を購求め來り、漆を剝ぎて分折せしに、各漆中には、硫化砒素を含有し、衛生上大害あるものあるを發見したれば、其の後嚴重に取締る事とありたりと、注意すべき事なり。

●モストーンと印度の農業●●●●●●●●　印度天文臺長ジョン、エリオット氏は、去月六日、モストーンに關する一編の報告書を公にせしに、其の長文の報告を約言すれば、本年モストーン季に、入りてより

は、印度全體は、降雨の恩澤に浴すべく、其の平均雨量は、二吋乃至四吋即ち常量より多きこと五分乃至一割の間にあるべしと云ふ。印度に於ては、モストーンの季節に入りて、雨量少なきときは、非常なる窮狀に陷り、農作物は、之が爲に枯死して、遂に、昨年より今年にかけて世人が、知る如き饑饉を生ずるものあるが、本年は天文臺長の報告に依れば、降雨の量も多く、又、孟買館の調書に依れば、將に、モストーン季に入らんとする前後の狀態は、印度全體、總じて、良好にして、本年の農作物の如き、或は、昨年と反して、今後の天候如何に依て、先は、豐年ならんと云ふ。

●身體及び腦髓の營養表徵 ●・●・●・●・● 身體及び腦髓の營養表徵は、最も重大にして且つ興味あるものとす。而して、營養は(一)形體或は成長によりて(二)營養に基因せる運動によりて、表示せらるゝこと是あり。殊に、運動及び運動の結果が、腦髓の營養狀態を表はすことは、種々の場合に於て、之を認むるを得べし。今、その二三を擧ぐれば、(一)すべて營養不良の嬰兒に於ては、自發運動著しく少なし。即ち、覺醒間は、少時も靜止することなきに反し、睡眠中は、殆んど何等の運動をも見ず。而して、自發運動が増加するに至らば、これ營養のよき徵候なり。(二)衰弱したる後には、音聲變じて物でしには、其の誰なるかを判じ得ざるに至る。次第に、快癒するに從ひ、以前の聲に快復す。(三)營養不良は、舞踏病又は指先の痙動が起ることあるも、體量増加し、營養進むときは、消滅するものなり。この外、身體の姿狀及び生長の割合は、營養の不良なるや否やを判するに當りて、參考となること多し。

●人類の起原は百萬年前 ●・●・●・●・●・● 英のワウジングトン

は、世紀雜誌に於て人類の起原を論じ、其の時代は、凡そ十萬年前ならんと云へる普通の說に異なりて、之を百萬年前若くは二百萬年前ならんと推定せり。氏は、普通に、科學者が人類の起原を十萬年前と限れるは、オークターナリー時代以前には、人類の骨を見出す能はずと云ふに在れども、リエルの如きは、之よりも以前の時代に屬する器具を發見したるに非ずやと云ひ、和蘭のハーレム湖上にては海戰あり、幾萬人の屍は其の中に葬られたるや、知れざる程なれども、往年、和蘭政府が同湖の水を干して乾地となしたるとき、一も人骨を見出さゞることあり。されば、人骨の有無、必ずしも、人類の有無を證するに足らず。之に反して、クオーターナリイ時代以前人類の生存したる巨多の例證ありと述べ、歐州の極北に於て、書契以前に屬する多くの人骨を發見したる如きは、其一なり。此の地に、人類の生存したるは、必ず、北極地方に結氷の始まる前の時代、即、ケルヴイン卿の計算に依りて、四百萬年前なるイオシーン時代ならざるべからずと論じ尙多くの例を擧げて、人類の起原は、少なくとも百萬年前なりと結論せり。

●惡い影響、少女の美貌　或日の夕方記者の一員は自轉車に乘つて新橋を通つた、すると、今春の何とかいふ藝妓屋からして一人の雛妓が脊い高いふとつた箱屋をつれてつゝと出て來た、もとより、自轉車上の一瞥、ふかく觀察する餘裕とてもなかつたが、つまり、その雛妓といふのは、絽の友禪を着て矢張絽へ金絲の入つた帶をしめた十五六の少女で、顏容はさまで美しいといふほどでもないが、何しろ、蝶々髷の水が垂るばかりに白粉の美しさ、まことに雪を束ねたらん、折からヅッと涼しくもある位、何か高慢らしい顏をして箱屋

に小言を云ひ〳〵角を曲らうとする時不圖すれ違つたのは汗くさい肩のところの色の褪めた中形の浴衣を着た、これも、十五六と十三四の少女手ずくねの束髮に煙草の粉や紙ぎれなどのついたる處を見ると千葉か岩谷あたりの女工の、仕事がへりであらう、二人は、さながら、電氣にでも打たれたかの樣に、かの皺妓の側に立止まつて、誇貌に過ぎて行くその後姿を、じろりと見送つて居た、そして、その思ひ入つたさまといふものは、名工が天　來の感應を受けた時のやうで、もし、兩人の頭をうつ人があつても分らなかつたらう、記者は、この有樣に思はずも、車をとゞめて更に二人の容子を打眺めたが、この二人は、その皺妓よりも却つて美しい位であつた、惡い事は、人の心に泌み込み易いもの、記者は近い未來に於て、二人の妓皺といふ、人の手によつて汚さるべき罪なき少女を見る事にありはしないかと、非常に不快を感じねばならぬ事となつた、形ばかり美しい、その理性の缺けた、營業者は、根滅にする事が出來なくとも、他の人の心を惑さないやうな區域に、推込てしまひたいものだ。（爲朝子）

●特別郵便貯金制●●●●●●●　遞信省にては、今回帝國郵便局所の設置なき外國に在留する本邦人にして、本國の郵便貯金に預入を爲さんとする者の便宜を計り、特別郵便貯金規則を制定したるが、例へば、布哇在留の本邦人にして、郵便貯金を爲さんとする時は、最寄領事館に至りて、郵便貯金預入申込書用紙を申受け、之れに記入して差出す時は、領事館は、該申込書を遞信省内の郵便爲替貯金管理所に送付し、預入金は郵便爲替又は銀行爲替に依り、是れ又同管理所に送付し管理者は之に對する貯金通帳を發行し、預入人の歸朝する迄は、一切管

理所が保管の責に任じ、若し貯金額五百圓以上に上る時は管理所にて公債證書に引替へ保管する筈にて、帝國郵便局設置なき外國に在留する本邦人には、大なる便利ある可し。

●●●●●●

●福田會の慈善旅行　福田會育兒院の鹽原温泉轉地保養は、大方の賛成を得、日本鐵道會社は厚意を以て、三割の特別割引を承諾したるに付、去に し、二日午前六時四十四分櫻井監督及保姆五名附添ひて、同地へ向け澁谷驛を發車したり。其の行裝は、男子は揃ひの麥藁帽子、中形單衣、兵兒帶にて四谷區赤十字社委員部の寄贈に係る纏料、其の他日用品を包みたる風呂敷を背負ひ、女兒も、亦た揃ひの洋傘に、中形單衣、板締帶にて、同じく風呂敷包みを背負ひたり。男子の部を二組に女子部を三組に別ちて、徽章を着け、各組に組長を置きて、小標旗を持し、進退乘降凡て指揮の下に働作し、極めて靜粛に打立ちたり。殊に、育兒中の年長者が、幼兒を背負ひて汽車に乘降し、恰も、眞實の弟妹をいたはるが如き趣きありしは、頗る、同情を惹きたりき。又た、青山寫眞館主佐野尚氏は、篤志を以て同行し、育兒の擧動及山水各所を撮影し、且つ、幻燈を寫して、彼等の娯樂を助くる由なるが、何、今後教育衞生に關する慈善幻燈會を催し、大いに同會の擴張に盡力すべしと云へり。

〇落葉籠

投稿規定

一、字体は楷書に限る、但し漢字の外は總て平假名にて、變体假名を用ふべからず。

二、文体は投稿者の隨意なれども、一行廿二字詰、五行以内の事、

但し可成はフリカナを附けて貰ひたし。

三、誌上の匿名は差閊なけれど、便宜の所へ必らず宿所姓名を明記すべし。

四、記事は隨意題目何にてもよけれど有益にして興味あるものを望む。

五、〆切期限は、月次懸題の歌文と同日の事。用紙は半紙尤もハガキにてもよし。

▲安藝、松柏子曰、私の御父様が、不幸にも昨年死去しました、其の時、遺言しまして、茲に百〇九圓五十錢あるが、之れは己が壯時から日に一錢づゝためて、漸くこれ丈にした誠に清淨な金だから、我が死後は、是非公共事業になげうてとの事でしたが、どーいふ方法にしたら宜敷でせうか、記者足下、及愛讀の姉妹方、どーか敎ていたゞきたいのです。

▲記者曰、松柏子の說につき、何卒讀者諸媛の御意見を、先づ御きかせくださいませ。

▲大和、植田幾子曰、私は、近頃より本誌を愛讀しはじめましたが、誠に女子の龜鑑となる好雜誌で、妹と共に、次號をまちかねます。

▲岡山、水野花子曰、口畫の幽雅なるは、妾等讀者に、非常の自然美を傳へ申候。付ては、古書などの幽大なる美觀に乏しからぬ、筆勢の眞に逼るものを、御選擇相成度候。

▲北海道、渡花子曰、私は札幌の範校附屬小學校を、今年卒業しましたから、東京に上り、確實なる高等女學校へ入學したいのですが、主義よくて、入費の安い學校を、敎ていたゞきたう御座ります。

▲長門、みどり曰、衣服の奥裏と、裾との縫合は、どちらに折をつけるのが誠でございますか、又、長襦袢の衿巾は、何寸が普通でございますか。

▲奥州、北上かは子曰、妾は女今川で育てられ、頗る頑固な方でした、其の後西洋流の女徳論をう

かゝひまして、之でもよいかと疑て居す處に、御社の女鑑と云ふものが世にあらはれました、それで日本女徳のよいと云ふ事を、又、かたく信ずる樣になりました、世の大勢の讀者には、尙かやうなお御方もあらせらるゝと、信じます、いかゞ。

▲東京、静子曰、　私は、「女鑑」「女子之友」「女學世界」の讀者に御座候。女鑑は梅、女子之友は櫻、女學世界は薔薇と見立て居候。長短は何事にも免かれ不申候へ共、此の三ッを折衷いたし候へば、私の理想いたし居候婦女雜誌を讀るゝものと存をり候。

▲築地、愛讀子曰、　貴誌が保守的文學趣味に富まるゝことは、世の一般に認むる處に御座候。妾の如きも大に裨益を受け申候へども、時勢の進歩と共に、今少しく近世的の文學趣味を御掲載被下候はゞ、本懐の至りに御座候。

▲武藏、愛花子曰、　女子風嬌問題に付きて、未だ貴誌の御意見をきかず。如何にして婦人社會の革新を成就すべきや、御高論承度候。

▲備後、ちさよ曰、　服裝の改良說なか〳〵八釜しく相成申候。鰕茶の袴固より必要のことならん、されども世には、日々の生活にさへ、苦痛しつゝある貧しき婦女あり。此等の救濟策こそ、今日の急務かと存候。幸に記者の御同情に富まるゝ先つ此の問題につき御意見承度候。

▲東京、つぶら曰、　本誌へ、兼題外の歌文を投じても宜しうございますか、又本誌、毎號短歌文章の外に、長歌、今樣、新體詩などの、兼題を設けて頂く事は、出來ますまいか、私はひたすらに是を希望いたします。

▲記者曰、　兼題外の短歌、文章は、おろか新體詩でも、長歌でも、今樣でも、誌面のゆるす限りは、

成べく掲載しますから、續々投書して下さい。

▲伊豫、まつ子曰、　私は幼き頃よりいひあづけの夫ありて、今は大學に、勉勵中あるが、あはれ此頃は肺病に冒され給ひぬ。さればとて、兩親を初め人々他へ嫁かん事をすゝむるのみ。どのやうあきらふ病なりとも、私は及ぶかぎり心を盡さうと一向に思ひますが、姉がたのお考は、どうでせうか。

▲記者曰、　本號から、皆さんが御寄なさつた歌は、秀逸をやめまして、天地人をとりました以下を、甲、乙、丙に別けましたが、諸媛如何ですか。

▲大阪、木村文子曰、　今度歷史的、はんち謎を、おだしにありましたが、至極おもしろくありますから、何卒毎回ひきつゞき、おだし下さるやうに、おねがい申します。

▲奈良、植村政子曰、　私は、田舍におりますときから、新聞にてハイカラ〳〵と云ふことを、折々見ておりましたが、近頃東京にまゐりまして、しきりにハイカラをきゝますがあれはあにのことですか、姉上樣方、をしへてくださいませ。

▲札幌、愛子曰、　我々日本の婦人は、如何にも、地理の思想に富みて居ませんが、せめては、我が國内位の事情だけは、是非知らぬ人がなき樣にしたいものです。

▲記者曰、　兼題の歌文投稿の節は必らず書式を御覽の上それに違ひませぬやう願ひ度のであります。此の頃は大分違反者が多く、遂に遺憾ながら沒書にするものも少く御座りません。ですから能く注意を願ひ度のです。

▲記者曰、　下野の手塚兼子孃に申上ます。御問の高等看護婦募集は、毎年十月の初め頃で、大學へ問合せ申ましたら、目下規則書調製中との事で

すから、出來次第贈てあげることに致しませう。

▲第二回繪探解答　これは畫を横にしますと、西洋館の入口に向て、其の屋根の處に、狸が居ます。當つた方は、

熊本　水島春子　伊勢　金津たい子
尾張　松本國子　肥後　佐々まつ子
京都　磯部新子　三河　鈴木はつ子

それから、狐と云ふ方は、

福島　倉島伊志子　三河　源たけ子
東京　松村あさ子　高松　田村順子

其の他八名と、又、犬と答へられた方は、東京の内田厚子外七名御座りましたが、姓名は略します。實を申しますと、記者の責も幾分かあるので畫の書き方が、余り上手すぎたから、解答が色々にあつたでもありませう。

▲ポンチ畫解答　この歷史的ポンチ畫は、即ち次の通であります。

一、小野道風　二、仁田四郎　三、源頼政
四、加藤淸正　五、阿部淸明　六、鰐沼平九郎

其の解答者は、

大阪　木村文子　三河　源たけ子
札幌　渡邊花子　尾張　國島千代子

それから、六番が一つ違た方は、

東京　松村あさ子　大和　植田いく子

其の他、二つ違ひ、三つ、四つ、違た方が澤山御座りましたが、紙面がゆるしませんから姓名は、すべて略します。

○口繪につきて

●富士川之眞景　こは、豫告の如く、本年七月華族女學校卒業生がものされたる合作にして、同校のゆるしを受け、特に、寫眞術の泰斗小川一眞氏をわづらはして、撮映しめたるもの、あはれ、

洋々三千里、烟波ねむれる東海のおもてに屹立として、遠く群巒を見おろし、太古の雪を含で玲瓏玉の如く、寶に、連綿たる皇基と共に、千代に八千代にゆるぎなき、姿不變の不二の嶺、靈光赫々として無限のほまれ世に高く、茫々として廣き裾野をながむれば、蜿蜒たる一條の銀蛇、流れいと淸く、おもへば過ぎし治承の秋、源家の嫡孫賴朝が、北條、佐々木、三浦などの兵士ども廿萬余騎を引き供して、此の富士川の東の岸にと陣どりける、此方もさるもの、如何で其のまゝおくべきと、平家の大將維盛は、同族忠度、知盛と、令旨を受けて五萬騎の荒武者どもを従へて、はるぐ〵こゝに走せ向ひたる甲斐もなく、更け行く夜半の月影次第に淡く、秋風寒く身にしみて、ものゝあはれもいと深く、寝耳にひゞく水鳥の、羽音に敵とおどろきて、箭一筋もこゝろみず、都をさして歸りける事は昔談と早やありぬ。星はうつりて人かはり、今や山川草木に至るまで、聖代の恩波に浴し、兩岸の一帯砂白く松青く、淸風梢を渡りて滔々たる水の流れに和し、神韻縹渺かぎりなきの風光、さながら獨の美神が寫し出したる如く、その枝の如何に眞に逼り、優艶にして、韻致に乏しからぬ、姫方が筆のあとこそ、いとゞ床かしき極みなれ。

●華族女學校卒業生　これも、已に豫告しておきました通り、華族女學校を、去ぬる七月目出度卒業なさつた、姫方の寫眞で御座ります。此の寫眞の右の方を見ますと、呉竹がいと茂く姫方の高潔にして、貞節なる心情をしめして居ります。其の下の第一列から姓名を申ますと、即ち、次の如くで御座ります。

第　一　列

徳川糸子孃　大隈こう子孃　菊池みつ子孃
小出鋌子孃　森よし子孃　朝吹ふく子孃
松平任男子孃　黒川榮子孃

第二列

野村末子孃　長井貞子孃　中隅富士子孃
鈴木なを子孃　寺崎いその孃　山科新子孃
千住千賀子孃

第三例

牧野悦子孃　原東梅子孃　江口八重子孃
橋元房子孃　吉岡芳子孃　秋山きく子孃
川田みか子孃

以上、ついでに申しておきますが、富士川の眞景の合作中に、名の記してありません方々は、日本畫のかはりに、洋畫を修業なさつたのださうで御座ります。

●梅颸女史の和歌　これは、諸媛がもとめに應じて出したるもの、梅颸女史が近世の文豪たる頼山陽外史の母として、はづべからざる才媛たるは、すでに、本誌第二百三十四號を以て、其の手翰を呈したるをり述べたれば、敢て茲に再びせず。（超舟漁史）

○次號豫告

筆蹟　高橋泥舟

翁は幕末の士、兵學にくはしく、最も書に巧みなり。記者一日諸媛の爲に、特に、その眞筆を乞ふ。墨滴淋漓、恰も蛟龍の風雲に乘じ、猛虎の深谷に嘯るが如く、誠に壯快なり。

群芳

華族女學校卒業生徳川糸子、橋元房子、野村末子、牧野悦子の四孃が優艶、妙麗の筆になりたるもの、山水あり、花鳥あり眞にいけるがごとし。

夫婦の道　三輪田眞佐子

女史此の稿を草して後、旅行するの止むを得ざる事となり、爲めに暫く休載せしが、今や歸京、されたれば次號を以て、其の續稿を介せんとす、諸媛まち玉へかし。

其の他例により趣味豐饒たり。

女鑑歌文月次兼題

九月廿日分

歌　月前雁

文　月見に友を招く文

右九月九日〆切

十月五日分

歌　擣衣

文　秋

右九月廿四日〆切

十月廿日分

歌　海邊紅葉

文　女郎花を人に贈る文

右十月九日〆切

十一月五日分

歌　船中時雨

文　菊

右十月二十四日〆切

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題

住所
姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題

住所
姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き様、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○總て書式に違ひたるは沒書とす。

○女子は、なに人にても、隨意に投稿するを得。

○天地人を取りし人には賞品を呈す。

總裁小松宮大妃殿下
副總裁鍋島侯爵夫人
大日本女學會發行（東京麴町區土手三番町廿八番地）

をんな

第七號發兌 ▲第一號以下再版出來せり

▲毎月一回廿五日發行定價金拾五錢全國無遞送料

大賣捌 東京神田表神保町三 東京堂

本誌は學識と經驗に富み而も婦人問題に熱心なる諸名家の賛助により誠實に女子の本分を完うせんことを心がけらるゝ淑女達の友たらんことを期し世の俗流に阿りて漫りに讀者の多からんことを望まず總べて不要の裝飾を省きて專ら記事の精撰に務め以て婦人雜誌たる品格を保たんとす◉本誌は其欄を論說學藝修身齊家世務史傳譚艸詞藻雜錄時事彙報に別ち普通に掲載する家政上文學上の記事の外に（一）科學の大意を掲げ學理の概念を得しめ（二）和漢名著の綱要を掲げ諸書の涉獵に便ならしめ（三）法制理財の事を平易にものし著き時事を說明し内外の情勢に通ぜしむ◉本誌は野卑なる言語又は劣等なる戀愛に關する文學を避け且つ賣藥其他下品なる廣告を掲げず◉本誌は勤儉貯蓄の美風を奬勵せん爲に毎號慈善貯金切手を挿入して其模範を示す

第七號目次

明治三十四年九月五日發行
女鑑
毎月二回五日廿日發行 第貳百參拾六號
明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可